

Hokkaido University News

北大時報

令和6年

1

No. 838 January 2024

白土博樹教授が日本学士院会員に選定

今枝宗一郎文部科学副大臣が本学を視察

令和5年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催



■ 全学ニュース

- 1 総長年頭挨拶
- 3 白土博樹教授が日本学士院会員に選定
- 5 今枝宗一郎文部科学副大臣が本学を視察
- 6 令和5年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
- 7 新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施
- 8 第17回（令和5年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催
- 9 令和5年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催
- 10 令和5年度「北海道大学企業研究セミナー」を開催
- 11 高橋理事・副学長が第13回日中中学長会議に出席
- 12 令和5年度第8回 定例記者会見の開催
- 13 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 15 アンビシャス特別助教向けセミナー「クラウドファンディング説明会・報告会」、「特許・社会実装関連のセミナー」を開催
- 16 起業家教育プログラム「アントレクレスト 未来への好奇心を育む」を開催
- 17 パープルM新種開発プロジェクト「ぶどうのスペシャリストと新種を考えよう！1DAY ワークショップ」を実施
- 18 北大発認定スタートアップFloatmeal株式会社がOpen Network Lab HOKKAIDO 6th Batch DemoDayにて「Audience Award」と「Best Team Award」を受賞
- 19 2023年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch 最終発表を実施
- 20 「北海道デジタル・スタートアップセミナー」を開催
- 21 令和5年度第2回サステイナビリティ推進員会議を開催
- 22 エコプロ2023に出展
- 23 大学院教育推進機構リカレント教育推進部が2023年度後期北大道新アカデミーを開講
- 24 外国人博士人材と企業の情報交換会 CAREER LINK MEETUP 2023（英語版赤い糸ONLINE）を開催
- 25 大学院生向け英語論文執筆セミナーImproving the Quality of Your Research Articleを英語で開催
- 26 中学生対象の体験型理科実験教室を開催
- 27 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 8名の研究者が講義を実施



高橋理事・副学長が第13回日中中学長会議に出席



北大発認定スタートアップFloatmeal株式会社がOpen Network Lab HOKKAIDO 6th Batch DemoDayにて「Audience Award」と「Best Team Award」を受賞



令和5年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催



新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

■ 部局ニュース

- 30 文学研究院FD「文系部局のための産学連携活動の基礎知識」を開催
- 31 生命科学院が「IGPシンポジウム」を開催
- 32 第18回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンライン開催
- 33 歯学研究院で「動物供養祭」を挙行
- 34 工学研究院等自衛消防訓練等を実施
- 35 工学部で救急救命講習会を開催
- 36 工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催
- 37 令和5年度第1回農学研究院FD研修会を開催
- 38 メディア・コミュニケーション研究院がジャーナリズム公開講座を開催
- 39 メディア・コミュニケーション研究院とダイバーシティ・インクルージョン推進本部が講演会「笑って考えるジェンダー・多様性・マイノリティー持続可能な大学と研究生活に向けて」を開催
- 40 2023年度北海道大学公開講座「外国語の学びについて考える」を開催
- 41 低温科学研究所技術部で第29回技術報告会を開催
- 42 スラブ・ユーラシア研究センターが2023年度冬期国際シンポジウムを開催
- 43 和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXIV」を開催
- 44 附属図書館でZotero講習会を開催

■ 博士学位記授与 45

■ 表敬訪問 48

■ 人事 49

- 50 新任教授紹介

■ 訃報

- 51 名誉教授 杉野目 浩 氏
- 51 名誉教授 沖野 教郎 氏
- 52 名誉教授 望月 喜市 氏



2023年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch 最終発表を実施



「北海道デジタル・スタートアップセミナー」を開催

表紙：総長年頭挨拶（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景㊦ 遠友学舎（北18条西7丁目）

■全学ニュース

新年のご挨拶 ---時代を先導するAuthenticな大学へ---

第20代総長 ほうきん きよひろ
寶金 清博



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

最初に、元日に発災した令和6年能登半島地震の被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。北海道大学の教職員・学生の皆様の中にも、被災地の出身者、関係者もいらっしゃると思います。日を追うごとに、被害の大きさが明らかにされ、二次的被害の拡大も懸念されております。一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

今年は、昭和の年号で数えると、昭和99年になります。この間、「平成」、「令和」と二度の改元を重ねてきました。しかし、平成、令和の時代は、歴史上類を見ない激動と発展の時代であった昭和の強い残照に照らされ、輝いていた昭和の日没を見るような時期でした。年号は変わっても、昭和元年、すなわち西暦1926年から、本年、令和6年（西暦2024年）までの99年間があたかも長い昭和であったかのような錯覚すら覚えます。

一方、1989年からの平成・令和の36年間は、日本社会は様々な面で長い低迷に陥りました。この36年間、私たちは、改元がもたらす時代の変わり目を実感できるような高揚感あるいは社会の上昇感覚がないまま過ごしてきました。

結果として、昭和元年からの約100年間のうち、最後の30年は、「失われた30年」と言われることとなりました。ご存知のように様々な数値を見ても、この30年の期間、日本は多くの面で世界の先頭集団から後れを取るようになりました。このことは、北大の研究者、職員、学生の皆さんもそれぞれの立場で、具体的な数値を想起できるはずです。

年頭のご挨拶で、改めて、この失われた30年とその原因をつらつらと述べるつもりは毛頭ありません。過去の停滞の細やかな分析は他の批評家に譲り、この年頭のご挨拶では、2024年、私たちが目指す方向について述べたいと思います。キーワードは、autonomous, proactiveそして、authenticという3つの言葉です。

年頭の一般的な挨拶で、「今年一年が平穏で穏やかな一年でありますように・・・」という言い方をしばしば目にします。私も過去の挨拶ではそのように表現してきました。今年も、私の気持ちは変わっていません。

しかし、それとは別に文頭の文脈に関して、誤解を恐れ

ずに言えば、私は、今年を含む数年は「変わらずに平穏な一年であってはいけない」と思っています。国際社会から取り残されつつある日本の状況を考えると、今の日本社会は、「穏やかな一年を過ごす猶予などない」と考えています。

昨年7月に北海道大学は、HU VISION 2030を発表しました。その中で、大学は、世界の共通の目標である持続可能なWell-being社会を目指す社会的モジュールの一つであると定義しました。そして、Well-being社会を目指すのは、当然のことながら、大学だけではなく、政府、企業、自治体、教育機関、医療機関など様々な組織です。その力の総和が社会変革、イノベーションの原動力です。

今の日本社会は、このWell-being社会という世界共通の目標に向けた全てのアクションにおいて、世界から大きく引き離されています。今回のHU VISION 2030は、北大の将来とそれを実現するための具体的戦略を述べています。しかし、その本質は、大学のためだけではありません。

昭和から30年以上引き摺ってきた日本型システムの制度疲労により日本社会は深い陥穽に嵌まり込んでいます。HU VISION 2030は、日本がこの危機から抜け出すために、大学として何をしなければならぬのか、何ができるのか、そして、何をすべきなのかを具体的に示したものです。

昨年末に採択された地域中核・特色ある研究大学強化促進事業についても同様のことが言えます。確かに、この計画は、「環境再生型の第一次産業の社会実装」をゴールとしており、北海道大学の強みを前面に打ち出しています。しかし、環境再生型の第一次産業の社会実装は、これがなければ、日本や北海道の未来はないと言っても過言ではありません。言い換えると、このプランは、北大が北大のために実現するものではなく、日本が昭和のシステムから脱却するために、なくてはならないものです。

さらに、北海道大学が目指している半導体教育・研究の強化、再生可能エネルギー研究の強化、ワクチン研究、計算化学なども、北海道大学のためではなく、この日本社会の生存のために必要不可欠なアクションです。

HU VISION 2030やこうした北大の教育・研究は、前にも申し上げたように“自律的 autonomous”であり、か

つ、“先取りの proactive”なものでなければならないと、私は思っています。大学が、autonomousでproactiveでなければならないという理念は、当たり前のことと感じられるかもしれません。しかし、私は、実際に国立大学は、この30年余り、必ずしもそうであったとは思っていません。

この失われた30年は、ちょうど、国立大学法人化の起案から、法制化、その実現と深化の時期に一致しています。大学改革という名の下に、この30年間、北海道大学を含む国立大学は、常に“改革”とその“評価”に日々追われ、まさに奔走してきました。

こうした大学改革に対して、この30年間、常に二つの異なる立場から批判が向けられてきました。一つは、『大学の自治が大学の根本的な価値であり、大学は社会の日々の変化に左右されず、教育・研究において中長期的な成果を求めるべきである』という批判です。もう一方は、主として産業界からの批判で、『大学は少しも変わっていない。あるいは、百歩譲っても、社会の変化のスピードと較べて、大学の改革にはスピード感が全く感じられない』というものです。多少、単純化しすぎているかもしれませんが、大学改革に対するメディア、行政機関、批評家、大学内部からの批判はこの二つのいずれかに分類されます。

私は、そのどちらも大学改革の実態を正確に捉えたものとは思っていません。ただ、「大学がautonomousでproactiveな改革のビジョンを提示していない」という指摘については、私はどちらの批判も正しいと認めざるを得ません。外側から強いられた改革に追われ、様々な申請とその採否に一喜一憂し、評価疲れ（Evaluation Exhaustion）と評価不安（Evaluation Anxiety）が多くの大学に見られました。その結果、自ら、自律的に時代を先取りするような大学改革のビジョンを示す意識が大学から失われつつありました。

こうした反省の上に立ち、北海道大学は、2024年、HUVISION 2030や様々な先導的なプランを通じて、autonomousでproactiveな戦略を示し、その実現を通じて、日本社会の飛躍を先導する大学を目指す決意をしています。その一年は、決して、穏やかな一年であろうはずがないと思っています。

3つ目のキーワード、authenticについて最後に述べます。日本でも、毎年、今年の流行語が選ばれます。昨年は、ChatGPT、AIも選ばれています。一方、世界的な辞書であるWebsterも毎年、今年の手紙を選んで選んでいます。2023年、様々な文章、メディア、AIでの使用頻度が大きく上昇したいくつかの言葉が選ばれていますが、最も高い上昇率を示した2023年のWebsterのyear wordは、“Authentic”という言葉でした。

authenticという単語は、英語学習者のレベルで言えば、決して難易度の高い言葉ではありません。しかし、今回Websterの選考の理由の一つは、authenticという言葉が、“authentic voice”とか“authentic self”というように、「自分らしい」という意味での使用法が広まったことだと思っています。

大学も、改めて、その歴史的特徴や地政学的な特徴を踏まえて、authentic“自分らしく”自律的なあり方を目指すべきです。その意味で、これまでもそうであったように、2024年、北海道大学は、authenticな大学を目指します。

いよいよ北海道大学創基150年のマイルストーンである2026年まで残り2年となりました。ExcellenceとExtensionを基軸として、authenticな新たな大学像Novel Japan University Modelを目指したいと思います。

末筆となりましたが、この一年が、皆様一人一人にとって平穏で穏やかな一年になることを祈念して、年頭の挨拶とさせていただきます。

白土博樹教授が日本学士院会員に選定

本学の白土博樹教授（医学）が、令和5年12月12日（火）開催の日本学士院第1174回総会において、日本学士院会員（第2部（自然科学部門）第7分科（医学・薬学・歯学））として選定されました。本学からは、令和2年選定の大塚榮子名誉教授（薬化学）に続き、10人目となります。選定に際しての感想と功績等を紹介します。

（社会共創部広報課）



しらと ひろき
白土 博樹 氏

感想

このたびは、日本（にっぽん）学士院会員にご推薦頂きましたこと、心より感謝申し上げます。12月19日（火）に会員選定授与式に

出席し、かつて北海道大学法学部教授であった川人貞史先生らとともに、新会員となりました。

私は北海道大学医学部に1981年に入学しました。医学部時代は、医学部漕艇部に所属し、同部長（顧問）は生化学教室の平井秀松先生で、世界的研究者の全人的な凄みを体感しました。卒業後は、入江五朗教授の北大病院放射線科に入り、研修しました。入江先生は、北大理学部入学後、医学部に移られた経歴を持ち、医師としてはがん患者に真摯に寄り添いつつ、未来を見通した医理工連携・産学連携研究を進め、既に高線量率腔内照射装置（現在、世界標準）等を開発されていました。小生がお世話になった頃の入江教授の下には、その後、深部がんへの重粒子線治療を確立された辻井博彦先生、病院医療画像情報管理システムを完成された宮坂和男先生、線量体積モデルの基礎を築かれた溝江純悦先生、体幹部定位X線治療を確立された有本卓郎先生をはじめ多くの優れた先輩がおられ、いずれのお仕事も、世界初でありました。今思うと、当時、理工学を医学に応用する能力と人材において、世界一の放射線医学講座であったと思います。

運よく、28歳から2年間留学する機会を得、カナダ・バンクーバーではパイ中間子治療研究者として、英国・マンチェスターではヨーロッパ最大のがんセンターで臨床腫瘍医として働き、これらの経験を通し、日本の放射線医学の長所と短所をグローバルな視点でとらえることができました。その後の北大における研究に関しては、日本学士院賞受賞決定に際し、北大時報令和4年4月号に書かせて頂いたとおりです。

さて、学術上の「達成」は、常に新しき「問題提出」を意味します。学術は、芸術とは異なり、後に続く人々によって「打ち破られ」時代遅れとなることをむしろ自ら欲するのであり、科学技術に生きんとするものは、これに甘んじねばなりません（マックス・ヴェーバー「職業としての

学問」）。一方で、若い研究者は、過去の研究者から成功だけではなく失敗の過程を学ぶことで、より早く、より高い段階に到達できます。北海道大学の後輩達には、我々がなし得なかった次なる段階へ勇気をもって挑戦してもらおうべく、論文中には表れない苦労話や、目に見えない北大の歴史基盤を語り継ぐことで、少しでもお役に立てたらと考えています。

功績等

白土博樹氏は、がんなどの放射線治療の分野において、世界中の医療現場の課題解決に繋がる顕著な功績がありました。多くの業績の中でも特に重要な研究成果を以下に紹介します。

- 呼吸や腸動などで動く臓器の腫瘍（肺がん、肝がん、前立腺がんなど）の動きを高速画像撮影を用いて解析し、それまでの高精度3次元放射線治療を発展させ、時空間的精度を高めた4次元放射線治療という新分野を開拓しました。
- 不規則に動く臓器の正常組織への照射範囲を減らすため、自動的パターン認識技術を用いた新たな4次元放射線治療技術を考案し、小型のがんの近傍に留置した金マーカの位置を0.03秒毎に $\pm 1-2\text{mm}$ の精度で捉え0.1秒以内に同期照射する世界初の「動体追跡X線治療装置」を産学連携で開発しました。
- 上記「動体追跡X線治療装置」を活用した国際共同研究を推進し、腫瘍の動きに関する学術的知見や予測数式モデルを一般公開することで、様々なタイプの4次元X線治療技術の世界的な普及とがん治療成績の向上に貢献しました。
- 動く臓器の大型のがんにも対応できるように、動体追跡技術と粒子線治療技術とを融合した「小型・動体追跡・スポットスキャン型陽子線治療装置」を考案し、最先端研究開発支援プログラムにて産学連携で研究開発しました。

5. 医理工連携・産学官連携・多施設共同臨床研究で、研究開発した装置や技術の橋渡し研究を推進し、国内外での薬機承認、保険収載、国際標準化を先導しました。

これらの研究成果は、リサーチフロント2007、平成27年産学官連携功労者表彰文部科学大臣賞、平成29年恩賜発明賞、令和元年日本癌学会学術賞、令和2年日本医療研究開発大賞 経済産業大臣賞、令和4年日本学士院賞などの受賞につながっています。放射線治療の医療現場の課題を解決すべく、早くから医理工連携・産学連携で画像認識技術を医療機器に応用され、そこから得られる新たな情報を基に広範な研究領域に展開し、それぞれで先駆的な成果を挙げられ、それらがその後の放射線医理工学や最先端放射線治療技術の基盤となっています。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和32年3月29日
- 昭和56年 6月 北海道大学医学部附属病院研修医
- 61年 4月 北海道大学医学部助手
- 61年10月 プリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）客員臨床研究員
- 62年10月 クリスティ病院ホルトラジウム研究所（英国）客員臨床研修医
- 平成元年 4月 } 厚生連総合病院帯広厚生病院放射線科主任医長
- 5年 3月 }
- 5年 4月 北海道大学医学部附属病院放射線科講師
- 10年 6月 北海道大学医学部助教授
- 18年10月 北海道大学大学院医学研究科教授
- 25年 4月 } 北海道大学病院陽子線治療センター長
- 31年 3月 }
- 26年 4月 } 国際連携研究教育局量子医理工学グローバルステーション長
- 令和 2年 3月 }
- 平成29年 4月 北海道大学大学院医学研究院教授
- 29年 4月 } 北海道大学大学院医理工学院長
- 令和 3年 3月 }
- 2年 4月 } 北海道大学大学院医学研究院医理工学グローバルセンター長
- 4年 3月 }

(医学研究院)

今枝宗一郎文部科学副大臣が本学を視察

12月26日（火）に文部科学省から、今枝宗一郎文部科学副大臣、清浦 隆大臣官房審議官、大月光康研究振興戦略官、西山崇志基礎・基盤研究課長、俵 幸嗣医学教育課長ら10名が本学を視察されました。

今回の視察では、最初に、創成研究機構ワクチン研究開発拠点（以下、「IVReD」）と同機構化学反応創成研究拠点（以下、「ICReDD」）を視察され、それぞれの拠点において、澤 洋文拠点長、前田 理拠点長から当該拠点の概要説明があった後、今枝副大臣から鋭い質問がなされ、それについて説明する形で活発な意見交換が行われ

ました。

次に、FMIフード&メディカルイノベーション国際拠点に場を移し、スタートアップ創出本部長の土屋 努副理事進行の下、本学のスタートアップの取組について説明、北大発スタートアップ企業である株式会社メカノクロス、Letara株式会社、大熊ダイヤモンドデバイス株式会社、株式会社調和技研の4社から当該会社の概要説明があった後、こちらでも活発な意見交換が行われました。

昼食をとりながらの意見交換では、本学側からは、寶金清博総長、山口淳二理事・副学長、増田隆夫理事・副学

長、行松泰弘理事、土屋スタートアップ創出本部長、小野裕之同副本部長のほか、北海道経済連合会の藤井 裕会長、札幌商工会議所の岩田圭剛会頭も参加され、産学連携及びスタートアップを中心とした議論が展開されました。

その後、北海道大学病院陽子線治療センターを視察された後、畠山鎮次医学研究院長及び渥美達也北海道大学病院長と「大学病院の医師確保」「医師の博士課程進学」などの諸課題について活発な意見交換が行われました。

（総務企画部総務課）



IVReDでの意見交換



ICReDDでの意見交換



スタートアップについての意見交換



昼食をとりながらの意見交換会

令和5年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催

11月30日（木）・12月1日（金）の両日、情報教育館にて、令和5年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催しました。

本研修は、「大学職員のキャリア形成と意識改革」をテーマとして、①職場である大学を、日常業務から少し離れた視点で捉える、②現場で起きている様々な問題の背景、改革の方向などについて考える、③他の参加者や講師と議論しながら、今後の課題を探っていくことを目的として、大学院教育推進機構高等教育研修センター（以下、「高等教育研修センター」）、総務企画部人事課及び学務部学務企画課が主催し、教育学研究院の協力により実施しているものです。

大学職員セミナーは、大学職員が、教員とともに大学改革の重要な担い手として、その専門性を高める学習・研修の場として、平成18年度から実施しており、今回が15回目の開催となります。

今回は、「大学職員のマインドとモチベーション」をテーマとして実施し、本学職員6名を含む、道内の国公私立大学、高等専門学校の職員39名が参加しました。

1日目は、高等教育研修センター長の山本文彦理事・副学長による開講の挨拶の後、職業倫理を意識することを目的として、ケーススタディによるグループワークを行いました。研修終了後の情報交換会では、活発な意見交換と参加者同士の交流が行われました。

2日目は、午前中に「私の仕事のマインドとモチベーション」をテーマに、北海道科学大学学務部の石黒祐介次長、室蘭工業大学経営企画課の齊藤雅利副課長、関西大学管財局管財グループの松田優一主任、本学学務部学務企画課大学院教育改革推進室の内藤輝章主任による発表・パネルディスカッションの後グループワークを行い、午後から本学大学院教育推進機構の山本堅一准教授による講演・ワークを行い

ました。全日程終了後に、山本堅一高等教育研修センター副センター長から修了証書が授与されました。

2日目のパネルディスカッションでは、会場から数多くの質問が出され、予定時間を超えて活発な質疑応答が行われるなど、熱いセッションとなりました。

アンケートでは、「モチベーションを上げるために、なるべく物事をポジティブに考え、小さなことでも目標を決めて取り組みたい」「グループワークや他大学他部署の方との情報交換を通じて、自分自身の物事の捉え方や視野を広くすることができた」「シンポジウムでは、自分の職場にはいないような、パワー溢れる方々の話を聞くことができてよかった」「グループワークを通じて、物事を多角的にとらえることが重要であると感じた」等の感想が寄せられました。

（学務部学務企画課）



山本文彦高等教育研修センター長（理事・副学長）による開講の挨拶



グループワークの様子



パネルディスカッションの様子



修了式後の集合写真

新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会を実施

新渡戸カレッジ学部教育コースでは、12月9日（土）高等教育推進機構において、「新渡戸カレッジ公開シンポジウム成果報告会」を開催しました。このシンポジウムは、新渡戸学（フェローゼミ）の成果報告及び意見交換を通して、学び得た知識を共有することを目的としています。

今年度は高大連携を行っている市内高校を訪問し、参加を呼びかけたところ、十数名の高校生や教員の参加がありました。また、当日来場できなかったフェローや高校生を対象に、昨年度に引き続きライブ配信を行いました。

新渡戸学（フェローゼミ）は、北大同窓生の新渡戸カレッジフェローが指導する少人数の演習形式の科目で、新渡戸カレッジ基礎プログラム学部教育コースの学生を対象とした必修科目に

位置付けられています。令和5年度は熱意にあふれた6人のフェローが担当し、10月7日（土）から全5回のゼミが繰り広げられました。各ゼミではテーマに関連した場所への視察やゲスト講師の講義などが行われ、グループで設定した課題の解決策について議論を深めてきました。また、フェローゼミでは、新渡戸カレッジ生の上級生がチューターとして学生をサポートし、先輩と後輩の絆を深める特徴的な取り組みも行われています。

シンポジウム当日は各ゼミテーマの関係者にも出席いただき、新渡戸カレッジ校長代理の山口淳二理事・副学長からの挨拶の後、6ゼミの代表グループによる発表が行われました。どのゼミの発表も工夫が凝らされており、独自の視点や新しいアプローチが見られ

ました。学生による質疑応答も大変活発に行われ、学生同士のコミュニケーションが深まりました。各ゼミの発表後には、学生企画行事等について、参加した学生からの体験談等が報告されました。すべての発表・報告の後、フェローゼミ統括の多田幸雄フェロー並びにチューター全体の統括役を担う3名のコアチューターから、発表内容やゼミ活動全般に対する講評があり、学生の投票による学生大賞の結果が発表され、本年度のシンポジウムを終了しました。

最後になりましたが、フェローゼミをご指導いただいた各フェロー及び支援教員、ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

（学務部教育推進課）



発表の様子



学生大賞を受賞した伊藤ゼミのメンバー



来場者全員での記念撮影

第17回（令和5年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、12月16日（土）に高等教育推進機構において、第17回メンターフォーラムを開催しました。このイベントは一般に公開しており、新渡戸カレッジ学部教育コース生、市内高校生、企業の方の参加もありました。

社会の多様な分野で活躍する方々がメンターに就任し、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念

頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部に講演会を行い、6名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部は、新渡戸カレッジ生が

各メンターに自由に質問し対話を行う交流会を実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ることができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくのか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）



講演会様子（左：黒田垂歩メンター、右：集合写真）



交流会におけるメンターとの対話の様子



令和5年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催

外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラムである現代日本学プログラム課程（以下、「現プロ」）の4年生による卒業論文ポスター発表会が、12月21日（木）に遠友学舎にて開催されました。

発表会では、今年度末に現プロ第6期卒業生となることを目指す4年生13人が、卒業論文の内容をポスター報告の形式で発表しました。発表された卒業論文は、英語または日本語で執筆さ

れ、日本の地域政策、経済政策、言語学やアートなどの様々なテーマについて、外国人留学生ならではの視点から研究を行った成果をまとめたもので、4年間学んできたことの集大成と言えるものです。

発表会には、高橋 彩理事・副学長をはじめ、同課程担当教職員、現プロ学生など多数の参加者が出席しました。各報告者からの興味深い発表に対して多くの質問が飛び交い、和やかで

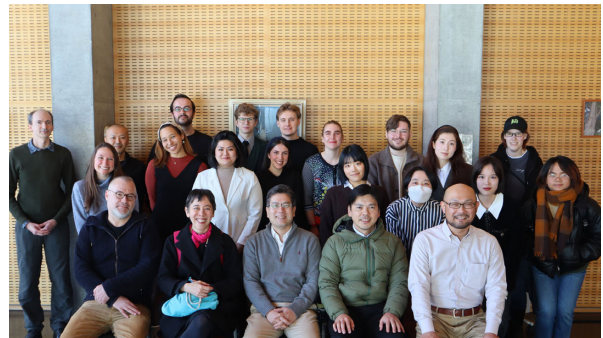
活気のある発表会となりました。

3月25日（月）開催予定の現プロ学位記授与式では、卒業論文が特に優秀と認められ、かつ、卒業論文ポスター発表会において優れた発表を行った学生に対し、現プロ最優秀卒業論文賞の授与が予定されています。

（学務部教育推進課）



現プロ4年生による発表を聞き入る高橋理事・副学長



卒業論文ポスター発表会参加者

令和5年度「北海道大学企業研究セミナー」を開催

12月1日（金）～3日（日）及び12月8日（金）～10日（日）までの計6日間、クラーク会館で「北海道大学企業研究セミナー」を開催しました。

本セミナーはキャリアセンターと校友会エルクが主催する合同企業説明会であり、平成16年度から毎年開催している全学的な就職支援イベントです。学生が主体的に企業・業界研究を行うことにより、就職活動へ向けての礎を築くことを目的としています。

本年度は4年ぶりの対面開催となり、北大生の採用に積極的な210社の企業・団体が参加し、採用担当者が30分の説明を3回行いました。

学生は1日で最大6社の説明を聞くことができ、延べ2,463名が参加しました。学内での対面開催のため採用担当者や北大OB・OGに気軽に質問できる機会となり、参加学生からは「企業の方に深く質問することができた」「質

間に丁寧に回答してくれた」といった感想がありました。

また、「短時間かつ私服で、気軽に参加できるという点がとても良かった」「幅広い分野の企業が出展されていて、視野が広がった」などの感想があり、企業・業界の理解をより深める機会になるとともに、「企業研究セミナーのおかげで、好きな会社を見つけました」と、対面開催ならではの企業との偶然の出会いもあった、学生の満足度が高いイベントとなりました。

さらに、新たな企画として学食スペースを活用して、土日限定で「商品PRコーナー」を設置しました。企業からの提供品のほか、キャリアセンターからおにぎりやパン、サンドイッチ、カップスープなどの軽食やお菓子を提供し、お昼時だけではなく、セミナー開始前や移動時間にも学生が訪れるなど休憩場所としても活用され、好

評のコーナーとなりました。

企業からの提供品は、自社の商品・製品や業務の特色を生かしたノベルティグッズなど様々であり、学生からは提供して下さった企業に対して「商品を見てその製造過程や、どのようなことを意識して製造された商品なのかなど、普段とは違ったことを考えることができ面白かったです」「色々な種類があって楽しかったし、どこの会社の商品か?と思いつながら見られたので良かった」といった声が寄せられ、楽しんで利用している様子が印象的でした。

キャリアセンターでは、本セミナーが企業・学生双方にとってより良いイベントになるよう引き続き検討していきます。

(学務部キャリア支援課)



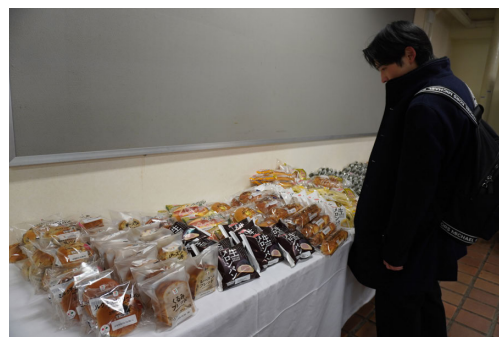
学生への配付物
(リーフレット、バッグ、ミネラルウォーター)



セミナーの様子



「商品PRコーナー」
企業からのメッセージを読む学生



多くの種類が用意された軽食

高橋理事・副学長が第13回日中学長会議に出席

11月28日（火）及び29日（水）、広島において第13回日中学長会議が開催され、高橋 彩理事・副学長が出席しました。日本側24の大学・関係機関、中国側20の大学・関係機関から合計約160名が参加しました。

日中学長会議は、2000年に東京で第1回会議が開催されて以来、隔年で開催されており、両国を代表する大学の代表者が一堂に会し、大学の在り方や共通の課題について議論を行う場となっています。

第13回となる今年は、「多様性と融

合～これからの時代に求められる人材と高等教育～」をテーマに議論が行われました。両国からの開会挨拶、来賓挨拶、日本側から広島大学の越智光夫学長、中国側から中山大学の高松（GAO Song）学長の基調講演に続き、2つのセッションが行われ、「気候変動・地球規模課題への挑戦」をテーマとしたセッションには高橋理事・副学長が登壇し、本学のサステナビリティに関する歴史や広大なフィールドを活かした気候変動に関する研究、本学が提供するSDGsに関連する教育などに

ついて発表を行いました。出席したほかの日中の大学の代表者からも各大学の特色ある取り組み事例が発表され、活発な議論が繰り広げられました。

全体会合において、新たに中国・華南理工大学の加盟が正式承認され、日中学長会議の加盟機関数は日本側24機関、中国側27機関となりました。

次回は2025年に中国・華南理工大学の主催により開催される予定です。

（国際部国際連携課）



集合写真



発表を行う高橋理事・副学長

令和5年度第8回 定例記者会見の開催

12月21日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けて分かりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。広報・社会連携本部の南波直樹教授の進行のもと、北海道大学病院の渥美達也病院長のご挨拶から始まり、医

学研究院（呼吸器内科）教授で北海道大学病院パーソナルヘルスセンターの今野 哲部長、北海道大学病院医療・ヘルスサイエンス研究開発機構の横田 卓特任講師、医学研究院（糖尿病・内分泌内科）の中村昭信講師、北海道大学病院（脳神経内科）の岩田育子助

教が発表を行いました。北海道教育庁記者クラブ加盟社等から4名の参加がありました。

発表内容は以下のとおりです。

（社会共創部広報課）

発表事項（発表者）

・北海道大学病院パーソナルヘルスセンターについて

（医学研究院（呼吸器内科）教授、北海道大学病院パーソナルヘルスセンター部長 今野 哲、北海道大学病院（医療・ヘルスサイエンス研究開発機構）特任講師 横田 卓、医学研究院（糖尿病・内分泌内科）講師 中村昭信、北海道大学病院（脳神経内科）助教 岩田育子）

※発表資料掲載URL

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/org/pr/press-conference/R5.html>



記者会見会場の様子



発表の様子



発表する今野教授



会見冒頭でご挨拶された渥美病院長と当日の発表者、病院関係者との集合写真
（左から中村講師、横田特任講師、今野教授、渥美病院長、西田 睦准教授、畑中 豊特任准教授、岩田助教）

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をする事としています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）情報】

基金累計額（11月30日現在） / 44,316件 6,843,376,180円

ご寄附状況

11月は280件58,388,484円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人愛全会、株式会社アスカ運輸、医療法人社団阿部皮フ科クリニック、伊藤組土建株式会社、医療法人社団圭光会いなむら皮膚科医院、癒しの森内科消化器内科クリニック、医療法人社団岩田皮膚科、会長会、株式会社理世化学、社会医療法人社団カレスサポロ北光記念病院、北見赤十字病院、釧路赤十字病院、栗山赤十字病院、医療法人溪仁会、医療法人社団廣仁会、社会医療法人孝仁会、一般社団法人札幌市医師会、株式会社札幌タック自動車、医療法人社団札幌道都病院、医療法人徳洲会札幌徳洲会病院、株式会社サンケミ、水ing株式会社、医療法人社団静和会静和記念病院、株式会社そうけん、総合病院伊達赤十字病院、株式会社東洋電気産業、ニーズ輸送株式会社、日本工営株式会社札幌支店、有限会社美工堂阿部組、ブルームプラス合同会社、北海道医師会、一般財団法人北海道河川財団、北海道和光純薬株式会社、丸共水産株式会社、八雲総合病院、日本赤十字社浦河赤十字病院

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	赤池 修	赤平 幸郎	秋山 三郎	芦立 嘉智	渥美 達也
阿部 雅史	網塚 憲生	アングアルカエゴマリアルガ	安藤 孝夫	井口 光雄	池田 虎三	石井 充	石井 哲夫
石井 紀夫	石垣 隆弘	石栗 秀	市坂 有基	伊藤 克明	伊藤 大貴	伊藤 雄三	猪股 路子
井原 博	今井 晋	入澤 秀次	上田 雅敏	植松 宏志	梅本 由佳	縁記 和也	遠藤 公憲
大井麻紀子	大島 浩幸	大津 珠子	大原 正範	小笠原美勝	岡田 耕二	岡村 章	沖崎 遼
織田 善彦	小田原一史	小原 大和	柿沼 正代	柏木 道彦	加藤 伸康	加藤 裕貴	金川 眞行
蟹澤 祐司	河合 新三	河本 充司	北上 英彦	衣川 暢子	木村 祐介	久住 一郎	工藤 俊夫
工藤 秀明	久保田幸一	栗原 誠治	上月 浩	小玉 正義	小長井奎幸	小橋 啓司	小林 賢人
小林 直人	齊藤 慈円	齊藤 晋	齋藤 久	坂本 大介	崎元 大志	佐藤 晶子	佐藤 理子
佐藤 優子	眞田 雄三	三升畑元基	塩野真由美	志済 聡子	柴田 祐次	島田 敏宏	清水 滋
下田 直彦	新宮 康栄	菅原 新也	菅原 満	杉江 和男	杉本 聡	杉山 隆文	鈴木 貴之
鈴木 英昭	瀬名波梁潤	高瀬登志彦	高橋順一郎	高橋 英明	高久 聡	高柳 涼	竹下 忠彦
武田 飛鳥	武田 浩子	多々納玲子	田中 博	田中 洋行	田畑 卓爾	玉木 長良	田村 昇
知地 英征	千葉 誠	土家 琢磨	津曲眞由美	寺澤 睦	渡慶次 学	豊田 威信	長井 宏平
中井 光野	那須 仁夫	那須 信江	西 則雄	庭野 陽樹	根本 叔治	野村 修一	萩原 達俊

花田 秀一	林下 英司	原 敬志	坂東 幸重	菱山 豊平	平口 悦郎	福井 滋	福士 幸治
福永 亮朗	福永 悟郎	藤岡 修	藤澤 裕子	藤田 修	藤田 正光	古川夕里香	坊垣 暁之
本間 明宏	真木 浩之	松井 耕二	松岡 秀直	松原 謙一	松本 嶺	三木 證永	水本 博章
三土 京子	水戸 康文	南田 大朗	宮田 信幸	村上 泰一	村瀬徳啓充	村瀬 亮太	森岡 仙太
柳 輝希	山口 晃司	山崎 知文	山下 裕久	山田 敏彦	八若 保孝	横山 考	横山 隆
吉田 悦子	吉田 広志	吉村 龍光	若狭 哲	和田 邦敬	渡邊 法子	渡部悠里子	渡部 克将

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年8～9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。
<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

（社会共創部広報課）

アンビシャス特別助教向けセミナー「クラウドファンディング説明会・報告会」、 「特許・社会実装関連のセミナー」を開催

創成研究機構研究人材育成推進室（L-Station）では、アンビシャス特別助教（以下、特別助教）育成プログラムの一環として、9月13日（水）に創成科学研究棟で「クラウドファンディング説明会・報告会」を開催しました。

特別助教には、次世代の研究者として研究資金獲得について広い視野を持ってもらいたいとの考えから、株式会社READYFORの宮本 武氏を講師に迎えて「クラウドファンディング説明会」を行いました。学術系クラウドファンディングの仕組みや事例のほか、一般的な外部資金の申請とは異なり一般市民から支援を得るために必要なことについての説明がありました。

続けて、今年度クラウドファンディングに挑戦した特別助教の孫 詩彥特任助教が報告を行いました。特別助教の中ではクラウドファンディング挑戦の第1号となった孫特任助教のグループは「生理用品を必要な人に提供できる包括的な社会を目指す！」をテーマに募集を行い、目標金額を達成しました。特別助教の任期は最大2年間であるため、クラウドファンディングの実施計画には工夫が必要となります。実際にクラウドファンディングを行うまでの経緯から目標金額達成後の活動などについて詳細が報告されました。

また、9月21日（木）に同じく創成

科学研究棟で、企業コンサルティングなどを行う株式会社パテントインベストメントの草野大悟代表取締役を講師に迎えて「特許・社会実装関連のセミナー」を開催しました。

L-Stationでは、研究成果の社会実装について研究者が想定している以外にも活用方法が隠れているのではないかと考え、企業コンサルタントの立場から全く異なる視点で研究成果を探ってもらうという新しい取り組みを企画しました。本セミナーは社会実装コンサルティングの前にコンサルタントの紹介を兼ねて、特許・社会実装についての講演を行ったものです。

草野代表取締役は自身の特許・商標を活かし自らも起業を経験しており、映画のプロデュースを行うなど、企業コンサルタントのみならず多岐にわたる活動を行っています。本セミナーの中では一般的な知財や社会実装の内容だけではなく草野代表取締役自身の会社の取り組みについても紹介がありました。

このセミナーを受講した特別助教の希望者は、社会実装コンサルティングを受ける予定となっています。研究者と企業コンサルという意外な組み合わせにより、研究の新たな活用方法が見つかることが期待されます。

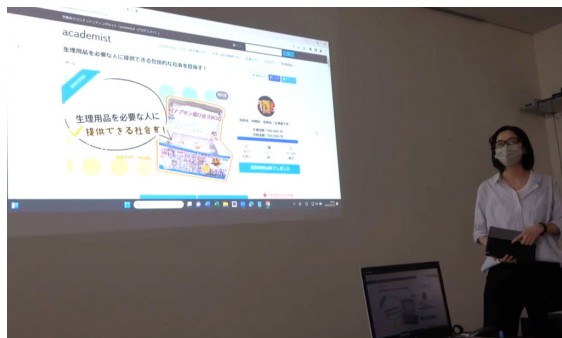
◆アンビシャス特別助教制度

本学の博士学位取得3年以内の者を対象に特任助教（任期2年）として採用し、人件費・研究経費の支援に加え様々な人材育成プログラムを実施する若手研究者育成制度です。特に本学の「博士人材フェロシップ事業」のキャリア形成の出口戦略として修了者の応募が期待されます。L-Stationが公募を担当し、令和4年度は10名、令和5年度は12名採用しました（L-Stationホームページ公開）。採用後の所属は創成研究機構と研究活動を行う配置希望部局の両方となります。特別助教には、研究エフォートの確保のために授業担当免除など教育業務負担が軽減される一方、大学院教育推進機構における博士人材フェロシップ事業の企画・運営への参画、創成研究機構が提供する各種研究者育成プログラムへの参加が求められる、教育力やマネジメント能力、キャリアパス選択のための能力開発など、専門分野+αの力を身に付けることを目標としています。（詳細はL-Stationホームページで公開）

アンビシャス特別助教制度ウェブサイト
https://l-station.cris.hokudai.ac.jp/overview_asap/



（創成研究機構研究人材育成推進室
 (L-Station)）



孫特任助教による講演の様子



草野代表取締役による講演の様子

起業家教育プログラム「アントレクエスト 未来への好奇心を育む」を開催

11月23日（木・祝）小中学生を対象とした起業家教育プログラム「アントレクエスト 未来への好奇心を育む」を株式会社Armoryと協力しオープンイノベーションハブ エンレイソウにて実施しました。本プログラムは起業の一連の流れをロールプレイングゲームのような感覚で体験できる点が一番の特徴です。また、子供たちが現役の銀行員を相手に融資をお願いする体験等、楽しんでアントレプレナーシップについて学ぶことができるような仕掛けがたくさん用意されています。

8月に実施した際も大変好評で、今回も定員50名に対して150名以上の応募があり、小中学生の関心の高さを感

じました。また当日は大学生の認定ファシリテーター10名が参加し、強力なサポート体制のもと実施することができました。

参加した小中学生は、ビジネスや社会課題について理解を深めるとともに、それを解決するためのアイデアを発表しました。イベント終了後、参加者からは「起業のイメージをつけることができた」「日常ではアイデアを考えたり発表したりする機会がほとんどないため、新鮮で楽しかった」という声が寄せられました。また保護者からは「子どもにはいろんな経験をしてほしいと思っている。学校ではビジネスや起業について学ぶ機会はほとんどな

く、学外のイベントもあまり多くないので、今後もこのようなイベントがあればぜひ参加させたい」との声をいただき、起業家教育を体験できる有意義な機会を提供することができました。

今回を含む札幌での2度の実施が大変好評だったため、次回は2月17日（土）に旭川市での開催も決定しております。産学・地域協働推進機構では、引き続きアントレプレナーシップ教育を展開していきます。

詳細に関しましては、産学地域協働推進機構 白石(a-shiraishi@mcip.hokudai.ac.jp)までお問い合わせください。

（産学・地域協働推進機構）



ディスカッションの様子



最終発表の様子

パープルM新種開発プロジェクト「ぶどうのスペシャリストと新種を考えよう！1DAY ワークショップ」を実施

産学・地域協働推進機構は、11月24日（金）FMIフード&メディカルイノベーション国際拠点にて、農業エンターテインメント事業を推進するノウタス株式会社、株式会社ニッセンレンエスコートと協働し「ぶどうのスペシャリストと新種を考えよう！1DAY ワークショップ」を開催しました。

ノウタス株式会社から高橋明久代表取締役CEOやパープルMプロジェクトリーダーの村上信五氏、農学部・農学院OGの戸塚惇子氏、長野の育種農家である牧 壯一氏、ぶどうマニアとし

て有名なフリーライターの少年B氏をお招きし、本学からは農学部、医学部など様々な学部から大学生及び大学院生など約20名が参加しました。

会場では、欠失型ゲノム編集技術の可能性やラボでの成長環境の構築、裂果する遺伝子の特定、栄養成長期間の短縮方法など、様々なテーマで活発に議論が交わされました。参加者からは「普段交流することが少ない他学部の学生ともディスカッションできて楽しかった」「ゲノム、再生医療、育種、エンターテインメントなど、業界のエ

キスパートの視点での話が聞けて、とても刺激的だった」などの声が寄せられました。

本ワークショップは今回初めての取り組みでしたが、盛況の内に終了することができました。今後も定期的にワークショップを開催し、議論を続けるとともに発展を目指し、引き続きこのような企画を実施していきます。

（産学・地域協働推進機構）



ワークショップの様子

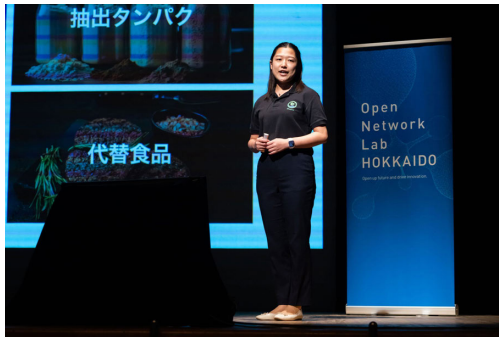
北大発認定スタートアップFloatmeal株式会社がOpen Network Lab HOKKAIDO 6th Batch DemoDayにて「Audience Award」と「Best Team Award」を受賞

11月30日（木）道新ホールで行われた、北海道の抱える課題解決に取り組むシード期のスタートアップを対象としたアクセラレータープログラム「Open Network Lab HOKKAIDO」の最終ピッチコンテストにて、北大発認定スタートアップ企業のFloatmeal株式会社が、観客による投票で選ばれる「Audience Award」と最も優れたチームに贈られる「Best Team Award」の2賞を受賞しました。

同社は高タンパクな「浮草」を動物性タンパクの代替品とすることで、食の安全保障と気候変動の課題解決を目指しており、本学の研究成果を基に発展させた独自のバイオ技術を持っています。現在は食用浮草生産の実証実験も行なっています。さらに浮草の研究開発、食品原料としての供給可能性、大手メーカーとの協業による商品開発が検討され、事業拡大へ向けて進んでいる点も評価されました。参加者から

は北大発認定スタートアップ企業への関心が寄せられ、審査員からは、「タンパク質生産という世界規模の課題解決は、大きな市場を狙えることに繋がる。それに加えて、独自の技術を持っていることが評価に繋がった」といったコメントが寄せられました。

（産学・地域協働推進機構）



Floatmeal株式会社の北村もあなCEO



コンテスト受賞者の集合写真

2023年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch 最終発表を実施

12月3日(日)に2023年度のDEMOLA HOKKAIDO 3rd Batchの最終発表の場であるファイナルデモンストレーションを開催しました。今回、水産学部が参加したことから、初の試みとして最終発表を函館キャンパスにて実施しました。

水産学部は「輝く未来へ、函館の水産物を極めよ！～地域を輝かせる秘策とは?～」というテーマでプログラムを実施し、環境の変化によって変わりつつある函館の水産物を今後どのような形で盛り上げ、持続可能な形にしていくのかなど、様々な側面からのディスカッションとなりました。また、水

産科学研究院の細川雅史教授、同研究院地域水産業共創センターの福田 覚教授らにお越しいただき、学生とアイデアについて意見を交わしていただきました。

DEMOLAはフィンランド発の産官学連携イノベーション創出プラットフォームであり、世界16ヵ国、60大学以上が参加している国際的な企業課題解決ネットワークです。学生と企業担当者が一緒にチームを組み、企業のリアルな課題解決に取り組むのが特徴です。

今年度も多くの学生から応募があり、本学学生の他、小樽商科大学、北海道情報大学、公立はこだて未来大学

に加え、新たに東京大学大学院、名古屋市立大学、岡山大学、鹿児島大学からも参加がありました。

当プログラムは、今年度に引き続き2024年度も3回開催する予定です。今後もより多様性に富んだメンバーでのディスカッションが実現できることを期待しています。

詳細に関しましては、産学地域協働推進機構DEMOLA事務局(demola@mcip.hokudai.ac.jp)までお問い合わせください。

(産学・地域協働推進機構)



チームメンバー集合写真



最終発表の様子



質疑に対応する学生



質疑応答の様子

「北海道デジタル・スタートアップセミナー」を開催

サステナビリティ推進機構は、北海道及び札幌市と11月24日（金）に「北海道デジタル・スタートアップセミナー」を学术交流会館で開催し、学内外から400名（会場307名・オンライン93名）の参加がありました。

最初に、北海道の土屋俊亮副知事から開催挨拶があった後、長谷川岳参議院議員（地方創生及びデジタル社会の形成等に関する特別委員会委員長）から来賓挨拶がありました。

次に、みずほ銀行産業調査部の福嶋正芳参事役から、「デジタル技術を使ったビジネスとは～入門編～」と題した講演をいただきました。福嶋参事役は、地方が抱える社会課題に対して、データセンターを含むデジタルインフ

ラの整備が重要な論点であり、北海道のアドバンテージを生かしてデジタル基盤整備を行うことによって、デジタルの好循環が生まれる可能性を持っていることを説明しました。

その後、ソフトバンクの宮川潤一代表取締役社長執行役員兼CEOから、「テクノロジーの新潮流～北海道のスタートアップ戦略に向けて～」と題した講演をいただきました。宮川代表取締役社長執行役員兼CEOは、産業の創出や生産の自律化を支える「AI共存社会」は、データセンターや半導体といったデジタルインフラのハード面と、企業・人材・サービスといったソフト面のエコシステムによって成立するとし、日本においては、デジタルイ

ンフラが都市集中しているため、地方に分散することの必要性を訴えました。北海道は冷涼な気候、豊富な再生エネルギー、国際海底ケーブル敷設などデジタルインフラでは利点があると指摘し、ソフト面での発展には、AIを活用したスタートアップでイノベーションを創出し、北海道が日本経済を牽引していくべきと話して講演を終了しました。

サステナビリティ推進機構は、今後も学外のステークホルダーと連携し、「持続可能な社会」の実現に繋がる教育・研究の取組・発信を進めていく予定です。

（サステナビリティ推進機構）



会場（学术交流会館）の様子



来賓あいさつを行う参議院 長谷川議員



講演を行うみずほ銀行産業調査部 福嶋参事役



講演を行うソフトバンク宮川代表取締役社長執行役員兼CEO

令和5年度第2回サステナビリティ推進員会議を開催

サステナビリティ推進機構は、12月1日（金）、令和5年度第2回サステナビリティ推進員会議をオンラインで開催しました。各部署等のサステナビリティ推進員及び同補佐の他、施設部職員等合わせて84名の出席がありました。

最初に、「サステナビリティ推進員制度について」の説明後、「令和5年度冬季の省エネルギー対策について」の協力要請を行いました。その中で、令和5年度夏季の節電結果及び「省エネルギー対策の手引き」*1を紹介し、無理なく無駄をなくす省エネルギー対策を推進するよう、説明を行いました。

次に、SDGs事業推進本部の加藤 悟教授より、「北海道大学×SDGsへの情報提供について」の、施設部環境配慮促進課の田中昌平係長より「ごみ分別

キャンペーンの実施について」の説明を行いました。

報告事項として、施設部環境配慮促進課の空橋博幸課長より「北海道大学インフラ長寿命化計画（行動計画）の改定について」の、サステナブルキャンパスマネジメント本部の北岡真吾特任准教授より、「自然共生サイト」認定に向けた取り組みについての説明を行いました。「自然共生サイト」の説明では、10月に環境省より雨龍研究林が「自然共生サイト」の認定を受けたこと*2、新たに札幌キャンパスが認定申請受審中であることの説明がありました。

その後、加藤教授より、「出張FD・SDについて」、「北海道大学のSDGs達成への取り組みと教育研究活動」の受講状況の説明の後、SDGs事業推進

本部長の横田 篤理事・副学長より、閉会の挨拶がありました。

サステナビリティ推進機構では、今後も引き続き、部局等と連携を図りながらサステナビリティ推進に関する活動を実施します。これらの活動はキャンパスの維持・管理や財政等に密接に関わる課題でもあり、北海道大学として持続可能な社会の実現及び未来づくりに貢献していくためにも、全学で一丸となって進めていきたいと考えます。皆様のご理解・ご協力の程、よろしくお願いたします。

*注1（学内限定）<https://www.facuity.hokudai.ac.jp/>学内向け/「省エネルギー対策の手引き」

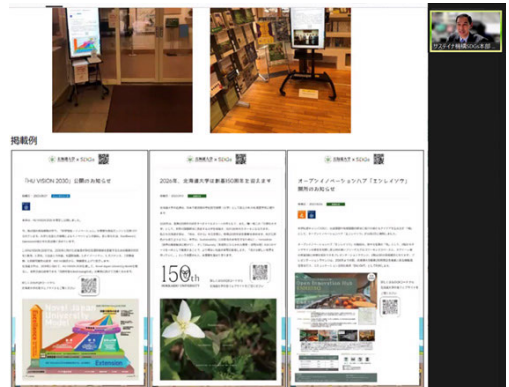
*注2 <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/12454/>

（サステナビリティ推進機構）

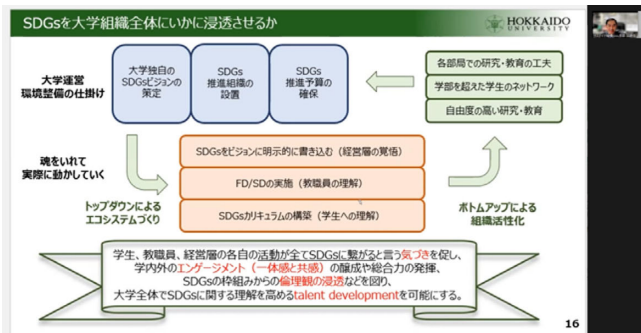
議題

本会議の位置づけ

1. サステナビリティ推進員制度について
協力要請
2. 令和5年度冬季の省エネルギー対策について
3. 北海道大学×SDGsへの情報提供について
4. ごみ分別キャンペーンの実施について
報告
5. 北海道大学インフラ長寿命化計画（行動計画）の改定について
6. 自然共生サイトの申請状況について
7. 出張FD・SDについて



「北海道大学×SDGsへの情報提供について」加藤教授より説明する様子



「出張FD・SD「北海道大学のSDGs達成への取り組みと教育研究活動」について」加藤教授より説明する様子



「ごみ分別キャンペーンの実施について」環境配慮促進課田中係長より説明する様子

エコプロ2023に出展

サステナビリティ推進機構と大学院教育推進機構は、12月6日（水）～8日（金）に東京ビッグサイト（東京都江東区）にて開催された、一般社団法人サステナブル経営推進機構と日本経済新聞社主催のエコプロ2023*にブースを出展しました。

ブースでは、北海道大学のSDGsへの貢献に関する取り組みについて紹介するとともに、博士課程の学生が「自身の研究テーマがどのように社会に還元され世界の課題解決（SDGs）につながるのか」についての説明ポスターを「博士学生が描く、64のミライ」と題して展示し、参加者に対して説明を行いました。

さらに、半導体拠点形成推進本部が10月に設置されたことを受けて、半導体について身近に感じることのできるワークショップ等を実施したほか、北大フロンティア基金の説明や、ブースに設置したモニターではHU VISION 2030の紹介も行いました。

3日間の開催期間中には、午前10時の開場とともに多くの小中学生がブースを訪れ、あらかじめ調べてきた北海道大学についての質問をしたり、博士課程の学生や職員の説明を聞いたりしていました。また、北海道大学の卒業生のほか、ブースを出展した他大学や企業等からの訪問も多く、北海道大学の唯一無二の特徴を知ってもらえ

かけとなりました。

今後も、サステナビリティ推進機構と大学院教育推進機構は、社会のステークホルダーを増やすとともに、大学の活動を積極的に発信していく予定です。

（サステナビリティ推進機構、
大学院教育推進機構）

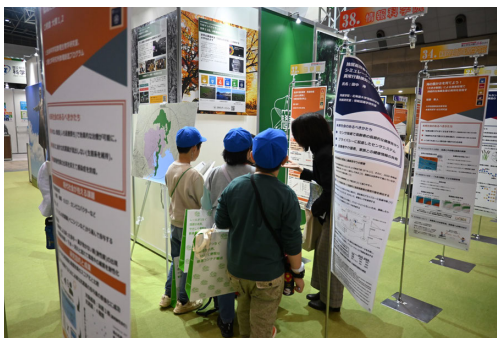
*エコプロとは、日本の企業、行政機関及び教育機関等、約500団体が参加して環境配慮型製品やサービス（エコプロダクツ・エコサービス）等の展示を行う日本で最大規模の一般向け展示会です。



北海道大学の基本理念を紹介する様子



北海道大学の広大なフィールドを紹介する様子



博士学生から説明を受ける子どもたち



研究紹介ポスターに関心を寄せる子どもたち

大学院教育推進機構リカレント教育推進部が 2023年度後期北大道新アカデミーを開講

大学院教育推進機構リカレント教育推進部は、北海道新聞社との包括連携協定に基づいて、主に学外の社会人を対象とした教育プログラム「北大道新アカデミー」を運営しています。2023年度後期は、9月2日（土）～11月25日（土）にかけて、理系・文系の2コースそれぞれ8回、理学部と文系共同講義棟を会場にして、対面で開講しました。歴史的な視点からみれば、大学とは、世代を超えて学ぶ意欲のある人が集まり、知識を学び、その内容をさらに発展させていく場でした。「北大道新アカデミー」は、本学が提供する、社会人の学び直しを意味するリカレント教育プログラムの一つに位置づけられています。

今回の文系コースは法学研究科附属高等法政教育研究センターが担当しました。テーマは「法のコンパス グローバル社会の新秩序形成に向けて」です。ロシアのウクライナ侵攻、グローバルサウスの勃興、気候変動など国際社会の問題をより深く理解するための視座を提供する講義が行われました。理系コースでは、獣医学研究院の研究者が講義を行いました。「『動物のお医者さん』のその先へ」を講義テーマに、人間と動物、そして地球の環境の健康を総合的に考えるOne Healthに関連する最先端の研究が紹介されました。後期の北大道新アカデミーの講座受講者数は文系コース35名、理系コース64名でした。受講後のアンケートでは

「難しいテーマだと思ったのですが、受講してみてもとても分かりやすく、知識を得ることができ勉強になりました。日本以外の国の法律も勉強になりました」「受講生のどのような質問にも、真摯に丁寧に答えてくださる先生方の姿勢にとっても感銘を受けました」との感想がありました。また、最年少の15歳の受講者からは「それぞれの先生の担当分野の基本的なことから詳しいことまで、たくさんのお話をうかがうことができ、貴重な経験となりました。8回の講義を通じて One Healthについて知ることができました」との回答がありました。

(大学院教育推進機構)

2023年度北大道新アカデミー後期 講義タイトル・講師

日 程	講義タイトル・講師	
	文 系	理 系
【第1回】 9月2日（土）	グローバリゼーションとアメリカの分断 会沢 恒 教授	動物のお医者さんから地球のお医者さんへ、One Healthが目指すもの 滝口 満喜 教授
【第2回】 9月16日（土）	グローバリゼーションと法秩序 尾崎 一郎 教授	ヒトと動物の共通感染症の発生要因・感染経路とOne Health 堀内 基広 教授
【第3回】 10月7日（土）	国際法とは何か 児矢野 マリ 教授	ヒグマとはどんな動物か：正しく知ることからはじめよう 下鶴 倫人 准教授
【第4回】 10月14日（土）	グローバリゼーションとフランス社会 中村 督 教授	人と動物の比較腫瘍学：がんを比べてわかること 青島 圭佑 講師
【第5回】 10月21日（土）	グローバル化時代の社会民主主義 前田 亮介 准教授	動物園・水族館の役割と繁殖への獣医師の関わり 柳川 洋二郎 准教授
【第6回】 11月4日（土）	法の視点から見る「チャイナリスク」 徐 行 准教授	動物たちからのヒントを人の健康に役立てる：熱を作る不思議な細胞 岡松 優子 准教授
【第7回】 11月11日（土）	グローバル経済のための私法秩序の形成 曾野 裕夫 教授	毒と動物の攻防 石塚 真由美 教授
【第8回】 11月25日（土）	日本の人権保障の特徴 佐々木 雅寿 教授	エキノコックスという寄生虫：その生態と北海道での歴史、そして彼らとのつきあい方 野中 成晃 教授

9/2、9/16、11/4、11/11 理学部大講堂
10/7、10/14、10/21、11/25 文系共同講義棟6番教室

外国人博士人材と企業の情報交換会 CAREER LINK MEETUP 2023 (英語版赤い糸ONLINE) を開催

大学院教育推進機構先端人材育成センターI-HoPは、11月28日(火)及び12月1日(金)に外国人博士人材(DC・PD)と国内企業の英語による情報交換会「CAREER LINK MEETUP 2023 -For international DCs and PDs-」を開催しました。

本イベントは今年で5回目を迎え参加企業の機運も高まってきたことから、初の二日間開催に踏み切りました。アクセンチュア株式会社をはじめ国内企業10社、DC・PDは「博士人材育成コンソーシアム」連携大学からの参加者を含む延べ33名が参加しました(東北大学、新潟大学、横浜国立大学、神戸大学、立命館大学)。

参加者は、事前のオリエンテーションとプレゼンテーション演習に参加

し、入念な準備をしてイベント当日を迎えました。当日は先端人材育成センター長の吉原拓也教授の挨拶に始まり、各企業のショートトークの後、ブレイクアウトルームに分かれて、博士人材による自己の研究内容やスキルのプレゼンテーション、企業によるブースセッションと、全て英語による密度の高い交流が行われました。

参加した学生からは「このイベントは非常に有益で、学生と企業との効率的なネットワーキングの機会となった」「企業の担当者と非常に生産的な時間を過ごし、業界で働くために必要なスキルについての知識を得ることができた」、企業からは「北海道大学のイベントはとてもオーガナイズされていて素晴らしい。毎年北海道大学か

ら良い学生の応募がきて嬉しい」とのコメントが寄せられました。

本学の博士後期課程は留学生が約3分の1を占めており、外国人博士人材のキャリア支援は喫緊の課題となっています。I-HoPでは、外国人DC・PDの日本でのキャリアパスを広げるために、様々な取り組みを行っています。中でも国内企業との英語による交流機会の創出は企業や連携大学からの注目度も高く、ひいては外国人留学生の日本国内での就職率向上に寄与するものとして、今後も継続開催が期待されています。

(大学院教育推進機構先端人材育成センター)



吉原センター長による冒頭挨拶

大学院生向け英語論文執筆セミナー「Improving the Quality of Your Research Article」を英語で開催

大学院教育推進機構先端人材育成センターI-HoPは、12月19日（火）に大学院生を対象とした英語による英語論文執筆セミナー「Improving the Quality of Your Research Article」をオンラインで開催しました。

質の高い英語論文を執筆するスキルは研究者にとって必須であり、日本人学生、留学生ともに、継続的な学習やトレーニングの機会が求められています。

当日は、科学技術論文の英文校正や翻訳等の研究支援を展開する株式会社

フォルテからグレッグアダムス氏を講師に迎え、英語論文の構成や適切な表現についての説明が行われました。

博士人材育成コンソーシアムの連携大学を含む全国5大学（北海道大学、東北大学、筑波大学、新潟大学、沖縄科学技術大学院大学）から計76名が参加し、終了後のアンケートでは「興味深く、ためになった。来年の修士論文執筆に活かせると思う」「科学論文の効果的な書き方について明確なメッセージが伝わるセミナーだった」等のコメントが寄せられました。

本学は第4期中期目標・中期計画に基づく大学院改革のうち、キャリア支援に関して、「学部から博士までの一貫したキャリア教育の強化」を掲げており、I-HoPはそのうちの大学院生向け英語によるキャリア支援プログラムを担当しています。従来留学生向けに開発されたスキルアッププログラムを日本人学生にも展開することで、多様なキャリアパスを広げるためのスキルアップの機会を提供しています。

（大学院教育推進機構先端人材育成センター）



講演の様子

中学生対象の体験型理科実験教室を開催

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部（以下、DEI推進本部）と情報科学研究院、理学研究院、工学研究院は、公益財団法人KDDI財団との共催で、中学生対象の体験型理科実験教室を開催しました。本企画はKDDI財団の「青少年啓発・育成活動助成」を受け、実施しています。開催に当たり、札幌市内の全ての中学校に企画のチラシを郵送し参加を募り、抽選によって選ばれた中学生と保護者が参加しました。

1) 情報科学研究院企画「『感じて』動くロボットを作るには」12月9日（土）開催（参加者12人）

情報科学研究院の小林孝一教授が講師となり、内容の説明や講義を行いました。まず、TAの大学院生のサポートを受けながら車輪型移動ロボットを実際に組み立てました。次に、ロボットにプログラムを入力し、指示通りに紙に書かれた黒い線の上を外れないで動くよう調整を繰り返しました。終盤には複雑に曲がりくねった線での実装までを体験しました。今年で3年目の実施となりますが、毎年人気の高い企画となっています。



複雑なコースに挑戦（情報科学）

2) 理学研究院数学部門企画「世界を支える暗号と数学」12月23日（土）開催（参加者14人）

理学研究院数学部門の朝倉政典教授が講師となり、まず暗号と数学についての講義を受けました。その後、各自持参したパソコンやタブレットを使用し、暗号の世界を体験。数学を用いた暗号の解読や作成の方法を学びました。サポートにあっていたTAの学生と昼食を食べながら、数学や大学生生活などの話をした後、それまでに習った暗号のルールを使い、講師が用意した問題に取り組みました。一日を通して、保護者と一緒に数学の世界を楽しみました。その後希望者は、現在大学文書館で開催中の特別展示『数学者桂田芳枝が切り拓いた女性研究者の道』を、古畑 仁教授、TA学生と共に見学しました。

3) 工学研究院企画「北大工学部まるごと体験ツアー」12月26日（火）開催（参加者40人）

環境循環システム部門の伊藤真由美教授より、各学科及びコースを紹介後、チーム（バイオ班・地球班・環境班）に分かれ、工学研究院における最新の研究分野の一部であるVRや電子顕微鏡を見学しました。見学後サポー



TA学生からのサポートを受ける参加者（数学）

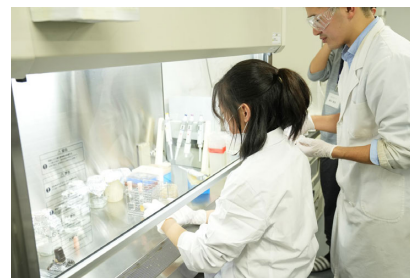
ト役の学生と工学部食堂で学食体験、総合博物館見学を経て、フロンティア資源・エネルギー研究棟にてチームごとに研究室見学や実験体験を行いました。最後に、中学生がサポート役の学生と学生生活や研究内容などについてリラックスした雰囲気の中懇談しました。別室では伊藤教授、大友陽子助教から保護者に工学部の組織、工学院への進学、卒業、修了後の就職などについて説明しました。ともに活発な質疑があり工学院・工学部への関心の高さが伺えました。

全ての企画において定員を超える応募があり、中学生や保護者の関心の高さを実感しました。また参加者アンケートの結果も非常に好評だったことから、今後も各部署等の協力をいただきながら、継続的に事業を実施していきたいと考えています。

DEI推進本部では、女子を中心とした中高生を対象とする様々な理系進路選択支援の取り組みを行っています。その他DEI推進本部の活動については、Webサイトをご覧ください。

<https://www.dei.hokudai.ac.jp/>

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）



研究室で実験を体験する参加者（工学）

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 8名の研究者が講義を実施

「魚の感染症の診断、予防および治療」 水産科学研究院 准教授 笠井久会

魚の感染症を研究する「魚病学」が専門の笠井准教授。魚にも細菌、ウイルス、原虫・寄生虫などを病原体とする多様な感染症があり、その多くが薬やワクチンなどの対処法が無いと話します。講義では、鮭の孵化場で病気を

診断する様子などの映像を交えながら、実際の調査研究についても紹介しました。水産業にも影響が大きい魚の病気。水産用医薬品やワクチンの開発が急務であると生徒達に語りかけました。



魚の感染症について解説する笠井准教授

日 時：2023年10月31日（火）13：25－14：15

会 場：北海道南茅部高等学校

参加生徒：2年生 12名

「未来社会を考える—大学での学びと研究—」 大学院教育推進機構 教授 宮本 淳

地球環境科学に加え、高等教育を専門とする宮本教授。前半は宮本教授が取り組んでいる氷床に関する研究について紹介しました。紙コップに南極の水を入れて会場に回すと、生徒達から歓声があがりました。後半は大学での学びや研究とはどういったものなのかを紹介しました。その事例の一つとし

て、環境科学院 博士後期課程1年の名畑公晴さんが社会課題の解決を目指す研究と実践の取り組みについて発表しました。最後に宮本教授は、研究などを通じて自分で考え、挑戦し続ける人になって欲しいとメッセージをおくりました。



生徒に問いかけながら講義を進める宮本教授

日 時：2023年11月2日（木）13：45－15：15

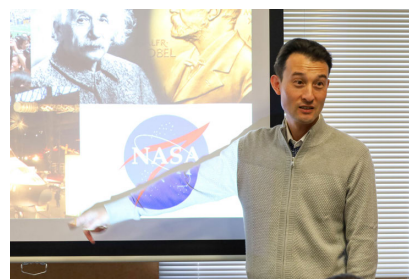
会 場：札幌日本大学高等学校

参加生徒：1年生 約110名

「宇宙じんの作り方」 低温科学研究所 教授 木村勇氣

11月7日（火）、札幌龍谷学園高等学校の生徒たちが低温科学研究所を訪れました。講義を担当したのは、宇宙における物質進化の謎の解明に向けて日々実験に取り組んでいる木村教授です。座学講義では、ロケットを使った無重力実験で星の欠片を再現した事例を紹介。国際的なチームを立ち上げ実験装置を作り、ロケットを打ち上げて

実験を成功させるまでの経緯を話しました。講義後は、生徒たちを研究室などへ案内。部品の選定から設計・組立までをすべて自身でおこなっているという製作途中の実験装置を公開したり、共同利用工作室では技術職員を紹介し、彼らの協力があってこそ実験が成り立っていると話し、研究はチームの総合力が必要であると伝えました。



夢について話す木村教授

日 時：2023年11月7日（火）13：30－14：30

参加生徒：札幌龍谷学園高等学校 2年生 16名

「いま学ぶアイヌ民族の歴史：先住民研究で世界をつなぐ」 アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

加藤教授は、北海道の先住民であるアイヌの人々の歴史を研究しています。講義では、礼文島などの遺跡で発掘した道具や種子から、アイヌ民族の文化や、当時の海外との交易ルートなどが分かってきたことを解説しまし

た。アイヌ民族のように国家を形成しない社会は世界中にあり、日本にも多様な歴史があると知ることが大事だと話しました。生徒たちは、発掘された石器や土器の実物に触れながら受講しました。



実際に発掘された土器を手に解説する加藤教授

日時：2023年11月8日（水）13：20－14：10、14：20－15：10

会場：札幌国際情報高等学校

参加生徒：2年生 44名

「シンプルな細胞集団の複雑なかたち作り」 先端生命科学研究院 助教 石原すみれ

石原助教は、細胞集団がどのように変形し、臓器などの複雑な形態が形成されるのかについて研究しています。講義では、自身の研究成果を映像等を交えて紹介しました。実際にどのように研究を進めているのか、知識や仮説

という武器を集めて敵（課題）を倒すRPG（ロールプレイングゲーム）に例えながら、解説。研究者を目指すきっかけとなった高校の先生との出会いなど、これまでの進路選択やキャリア形成についても話しました。



自身の研究について解説する石原助教

日時：2023年11月10日（金）14：10－15：00

会場：北海道岩見沢東高等学校

参加生徒：2年生 42名

「性が決まる仕組みの生物学—消えゆくY染色体の運命—」 理学研究院 教授 黒岩麻里

黒岩教授は、動物の性が決まる仕組みや染色体の研究をしています。現在進行形で小さくなり続けているY染色体と人の運命はどうなるかについて、実際に提唱されている3つの仮説を提示し、生徒たちはどの仮説を支持するかグループで話し合いました。このうちの1つ、「Y染色体が消えても男性が生まれるように進化する」という仮

説について、黒岩教授は自身の研究としてY染色体がなくてもオスが生まれてくるトゲネズミの研究を紹介。Yの消失に伴い新しい性決定因子を進化させた事例と、別の染色体に融合させてYが巨大化することで寿命を延ばした事例を挙げ、消失と巨大化という真逆の選択肢によってオス消滅の危機を乗り越えた進化を解説しました。



生徒たちの質問に答える黒岩教授

日時：2023年11月15日（水）13：45－15：30

会場：札幌日本大学高等学校

参加生徒：1年生 約80名

「人と自然の共生を考える」 北方生物圏フィールド科学センター 森林圏ステーション・苫小牧研究林 教授 中村誠宏

中村教授は、群集生態学を専門にしており、気候変動や生物多様性の損失が、植物と昆虫の関係にどのような影響を与えるかを研究しています。講義では、まず北大にある7つの研究林とそこで行っている生態学の野外研究方法について説明。続いて、温暖化が植物を介して昆虫に与える影響を調べたミズナラとダケカンバの実験を紹介しました。ミズナラが、温暖化の影響下では昆虫に食べられづらくなるよう、葉の形質を変えるのに対し、ダ

ケカンバは食害度が上がってしまうといい、この結果から、人間がミズナラを伐採してダケカンバを植えると温暖化の影響を受けやすい森林になると解説しました。中村教授は、「保全」と「利用」をバランスよく行うことで、生態系サービス、つまり自然の恵みを受けられる環境維持が大切だと話し、この恵みを利用して社会課題の解決を考えてみてほしいと生徒たちに呼びかけました。



生徒たちへ森での実験について解説する中村教授

日 時：2023年11月27日（月）16：00－17：00

会 場：立命館慶祥中学校

参加生徒：1－3年生 30名

『『両刃の剣』放射線の身体への影響を考える』 保健科学研究院 准教授 福永久典

放射線は目に見えない「両刃の剣」。主に放射線生物学を専門に活動している福永准教授は、福島第一原子力発電所事故後に福島県の病院で医師として勤務していた時、放射線の健康に対する影響を心配する住民から「ここ（福島）に住んでも大丈夫でしょうか？」と問われたといいます。そして、その問いに対する答えを求めて、今も研究を続けていると話しました。講義では、放射線の有用性と危険性の両面を

説明し、常にリスクとベネフィットのバランスを考えながら扱う必要があると説明。健康への影響について考える際には、放射線量の観点から見ると同時に、放射線への耐性に個人差があることも加味する必要があるだろうと説明しました。様々な答えがある世界の中で、周囲と議論を重ねながら、自分なりの答えを追究する大切さを生徒に伝えました。



生徒の質問に答える福永准教授

日 時：2023年11月29日（水）15：50－17：20

会 場：北海道札幌北高等学校

参加生徒：1－2年生 約24名

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。

内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は北海道の高校等を対象に31名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/>

・Facebook

@Hokkaido.univ.taiwa

（広報・社会連携本部）



リサーチタイムズ



フェイスブック

■ 部局ニュース

文学研究院FD「文系部局のための産学連携活動の基礎知識」を開催

文学研究院では、令和5年度第4回FD研修を12月15日（金）にZoomによるオンライン形式で開催しました。講師には、産学・地域協働推進機構副機構長の寺内伊久郎教授をお迎えし、「文系部局のための産学連携活動の基礎知識」と題し、質疑応答を含み約1時間にわたり実施しました。

本FDでは、初めに、文学研究院の教員と関わりの深い著作権制度を中心

に、特許制度についての解説も含めた知的財産制度の基礎知識について説明があり、次いで本学の産学連携制度として、共同研究と学術コンサルティング制度の比較、及びスタートアップ支援等について説明いただきました。

講演後の質疑応答では、授業やオープンキャンパス等で資料を作成する際の著作権の考え方に関する質問があったほか、本学の産学連携制度として人

文系の研究シーズと企業をマッチングさせる仕組みを要望する意見が出されるなど、参加者の産学連携活動に対する関心の高さがうかがえました。

今回のFDは、研究院内の教職員70名が参加し、大変有意義な機会となりました。

（文学研究院）



講師を務めた産学・地域協働推進機構副機構長の寺内教授



研修はZoomにより資料を写しだして行われた

生命科学学院が「IGPシンポジウム」を開催

11月27日（月）、北キャンパス総合研究棟7号館にて「IGPシンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムではInternational Graduate Program (IGP) の協力のもと、生命科学学院所属の博士後期課程学生が集い、それぞれが専門に展開している研究の進捗・成果について、口頭発表やポスター発表を通して活発に

ディスカッションを行いました。多様な専門分野を擁する本院では、このような異分野研究交流を通じた、学際的な研究センスをもつ研究人材の育成を特に重視しております。

本シンポジウムは、北大という世界中から若手研究者が集まる環境において活発な討論を行うことにより、若手研究者が将来的に科学者として国際的

に活躍するための一助となりました。

開催にあたりご指導・ご協力をいただいた先生方、ご支援をいただいた事務担当者の方々、そして準備・運営にご協力いただいた留学生・学生の方々に深く御礼申し上げます。

(生命科学学院)



活発なディスカッションが行われたポスター発表



シンポジウム参加者の集合写真

第18回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンライン開催

医学研究院では、12月5日（火）に第18回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンラインにて開催しました。

本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点で

す。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

今回の研究成果発表会では、52名の教職員・学生等の参加があり、センターの各分野から最新の情報が提供され、活発な質疑応答が行われました。

また、特別講演として、慶應義塾

大学医学部放射線科学教室の陣崎雅弘（じんざきまさひろ）教授による「IT/AIの医療への実装を目指して～AIホスピタルプロジェクト～」と題した講演を行いました。参加者にとって、今後の取り組みに向けた新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。

（医学研究院）



講演する慶應義塾大学医学部の陣崎教授



特別講演演者によるオンライン開催の様様

歯学研究院で「動物供養祭」を挙

歯学研究院では、11月28日（火）、令和5年度動物供養祭を執り行いました。

本供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（ラット、マウス計2,008体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、

学生等の動物実験関係者約20人が参列しました。

最初に網塚憲生歯学研究院長から挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の船橋 誠教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実

験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）



参列者に挨拶する網塚歯学研究院長



「祭文」を読み上げる船橋委員長



献花を行う参列者

工学研究院等自衛消防訓練等を実施

工学系部局では、10月17日（火）に自衛消防訓練を実施しました。

訓練は、4年ぶりに教職員・学生も参加した形で工学部A棟及びB棟の建物を対象に行われ、地震により火災が発生したとの想定で、同建物内で授業を行っていた教職員・学生の避難及び自衛消防隊による自衛消防活動のほか、煙中での避難を体験できる煙道体験も行われました。

自衛消防活動は、自衛消防隊長の佐々木好美工学系事務部長の指示のもと自衛消防隊各班が、初期消火、安全防護、負傷者救護、避難誘導などの自衛消防活動を行い、その状況を、トランシーバーを用いて隊長に報告すると

いう内容で進められました。訓練において各班は、トランシーバーや消火栓、担架などの防災・救護用具を実践しながらに使い、普段使い慣れないこれらの用具の使い方や作動の具合を確かめるとともに、授業を行っていた教室から避難する学生の避難誘導を行うなど、災害時に基本となる動きを確認しました。

今回の訓練は、久々に教職員・学生が参加し、たくさんの避難者の人混みの中での困難な自衛消防活動となりましたが、より実際の災害時に近い状態を体感できる有効な訓練となりました。

また、訓練後に行われた煙道体験では、教室内に実際に訓練用の煙をた

き、予め決められたコースを設定し、参加者は、実際には高温となる煙や、炎のある場所を避けることなどを想定しながら、身をかがめて慎重に移動していました。

訓練終了後は、幅崎浩樹工学研究院長から講評があり、今回は4年ぶりの教職員・学生も参加した訓練となったが、実際に訓練を行うと課題や改善が見つかるため、今後とも継続して訓練を続けてほしいとの感想が述べられました。

(工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター)



状況報告する警備員の様子



救護班によるケガ人救出の様子



幅崎工学研究院長による講評の様子



煙道体験の様子

工学部で救急救命講習会を開催

工学系部局では、11月30日（木）に公益財団法人札幌市防災協会から救命指導専門官を招き、救急救命講習会を実施しました。

工学系部局のエリア内では、「どこにいても5分以内にAEDによる処置が可能となる」目安を満たすよう、13か所にAED（自動体外式除細動器）を設置しています。

本講習会は、学内外に関わらず心肺停止に陥った人がいた場合、AEDの

利用などにより救急救命措置を行うことができるよう、心肺蘇生術を自身の技能として体得することを目的に毎年実施しているものです。

今年度は教職員・学生ら7名が参加し、心肺蘇生法やAEDの使い方を学びました。

昨今の情勢を踏まえ、講習内容も通常時の心肺蘇生法等及びAEDの取り扱い方に加えて、新型コロナウイルスの感染対策を講じた心肺蘇生法及び密

にならないAEDの取り扱い方を盛り込んだものとなりました。

講習後、参加者には受講の証として工学系部局独自のピンバッジが授与されました。

工学系部局では、来年度以降も救急救命講習会を開催していく予定です。

（工学院・工学研究院・工学部、
情報科学院・情報科学研究院、
量子集積エレクトロニクス研究センター）



挨拶をする藤木一夫講師



講習会の様子



心肺蘇生法の実習

工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催

工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、毎年「こころの健康セミナー」を開催しています。

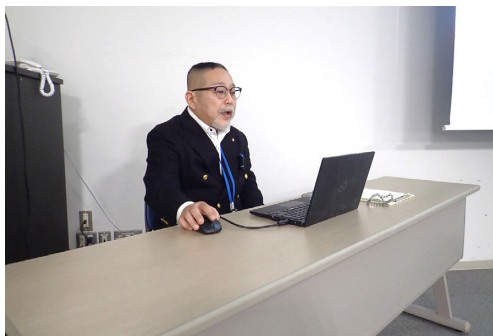
本年度は、12月15日（金）に「工学系部局なんでも相談室」カウンセラーである石原一人氏（合同会社アド・レ

ジリエンス カウンセラー）を講師としてオンライン講演形式により開催しました。

本セミナーでは「『なんでも相談室』の相談事例」と題して、個人情報を大幅に加工したうえで、相談事例の報告が行われ、参加した教職員はその認識及び理解を深めました。参加者からは

有益であった旨の感想が多く寄せられ、有意義なセミナーとなりました。

（工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター）



石原氏による講演の様子

令和5年度第1回農学研究院FD研修会を開催

12月1日（金）農学研究院にて、令和5年度第1回FD研修会を開催しました。今回は、学生相談総合センター副センター長・アクセシビリティ支援室室長の榊原佐和子先生に「北大の障害学生支援を取り巻く現状と合理的配慮の実際」をテーマにご講演いただきました。野口 伸農学研究院長による開会挨拶の後、柏木純一農学研究院教務委員会委員による司会の下、榊原室長によるご講演とその後の質疑応答がありました。研修会には20名ほどの参加があり、今後の必要な対応に向けた参加者の問題意識が高く、活発な質疑応答となりました。

講演の内容としては、大学入学後の学生生活の中で発症、ないし自覚されるケースも多い様々な障害の特徴や、大学における自殺に関するデータの紹介を皮切りに、大学入学後に様々な困難を抱える学生への支援が今後ますます必要になること、現場の教職員がその場の判断で対応する、いわゆる「教

育的配慮」と、障害者差別解消法に基づく「合理的配慮」との関係など、現状認識や「配慮」に関連する基本的な知見についてお話がありました。高校までの「特別支援教育」であれば、周囲からも見えやすい障害に関しては、必要な支援を受けやすい環境になってきています。一方で、大学での「障害学生支援」については、自分の障害・困難を本人が自覚したうえで、必要な支援を本人の意思で申請することが、合理的配慮を受けるための起点となっており、申請があった時点で担当者と「建設的対話」を進め、可能な対応を考えるとという点で、高校以前の「支援」とは大きく異なります。「障害学生支援」と聞くと、現場で非常にキメ細かな配慮を求められるのではないかと、あるいは、他の学生と評価のバランスを損ない、却って不公正な結果をもたらすのではないかと、といった不安や疑問が先に立ち、その必要性に対し教職員側の誤解が多く発生している可

能性があるため、今後も研修会などで周知されるべきかもしれません。

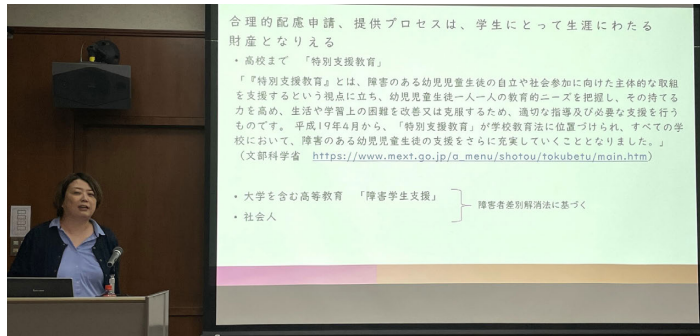
講演の後半では、合理的配慮を求める申請が出された場合取るべき対応、あるいは対応に向けての「建設的な対話」の実際や、今後の在り方を具体例なども交えてお話しいただきました。特に最近では、「合理的配慮」を求める事例がアクセシビリティ支援室で相談を受けた件数で見ても、留学生を含めて増えてきていること、全国規模でも障害学生として認知される数が増える傾向にあることなどが紹介されました。

今後も講演会に限らず、農学部進学時の学生向け啓発支援活動など、様々な連携体制についての提案もありました。ご協力いただいた皆様に、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）



野口農学研究院長による開会の挨拶



榊原室長の講演の様子

メディア・コミュニケーション研究院がジャーナリズム公開講座を開催

メディア・コミュニケーション研究院は12月2日（土）、高等教育推進機構で、市民公開講座「『メディアの沈黙』とジャーナリズムの力」を開催しました。本講座ではジャーナリストの江川紹子氏（神奈川大学特任教授）にご講演いただきました。150人以上の学生や市民が集まり、講演とその後の公開討論に耳を傾けました。

江川氏は、メディアが当初取り上げなかったオウム真理教の問題に取り組み、早くから取材し、報じ続けました。この日の講演では、旧ジャニーズ事務所の故ジャニー喜多川氏による性加害問題についてメディアが「沈黙」を続けたことが性加害を拡大させた

される問題について取り上げ、報道しないことによる人権侵害があると指摘。「記事にしない場合の責任」「報じることで守る人権がある」と問題提起しました。

講演に続き、本研究院の城山英已教授が司会を務め、江川氏に加え、東京大学大学院法学政治学研究科の遠藤乾教授（前北大教授）、北海道放送（HBC）コンテンツ制作センター報道部の山崎裕侍氏が登壇して公開討論を実施。様々な圧力を受けながらもメディアやジャーナリズムが持つ力を再確認しました。

今回の公開講座はHBCとの共催で行いました。また全学教育一般教育演習

（フレッシュマンセミナー）「調査報道入門」を受講している学生が企画や準備に参画してくれました。ある学生は講座参加後に提出したコメントシートに「メディアの課題が浮き彫りになっていく中でメディアのあるべき姿を考える機会になったと同時に今まで以上にメディアに興味がわいた」「情報源が増えていく今だからこそ影響力のあるマスメディアに全幅の信頼を寄せてしまうのではなく、小さい声を見逃さないようにしなければならないと思う」と感想を寄せました。

（メディア・コミュニケーション研究院）



メディア・コミュニケーション研究院の市民公開講座で講演する江川氏

メディア・コミュニケーション研究院とダイバーシティ・インクルージョン推進本部が講演会「笑って考えるジェンダー・多様性・マイノリティ—持続可能な大学と研究生活に向けて—」を開催

メディア・コミュニケーション研究院研究成果公開委員会は、ダイバーシティ・インクルージョン推進本部と共催し、12月7日（木）に講演会「笑って考えるジェンダー・多様性・マイノリティ—持続可能な大学と研究生活に向けて—」を開催しました。この講演会は、教職員がダイバーシティ推進について理解を深めることを目的にFD研修として企画されたもので、「ダイバーシティ・インクルージョン推進に向けた部局等による取組支援プログラム」に採択され、ダイバーシティ・インクルージョン推進本部から費用支援を受けて実施されました。東京大学大学院総合文化研究科の瀬地山角教授を講師に迎え、対面とオンライン、あわせて約80名が参加しました。

瀬地山教授はジェンダー論を専門とし、東京大学において教鞭をとる傍

ら、NPO法人の理事として保育所の運営にも参加しています。講演ではまず、日本をはじめアジア各国における年齢別女子労働力率などのデータから、国ごとに異なる社会規範が示されました。続いて男性の育児参加が必須であることについて、著書『炎上CMでよみとくジェンダー論』（光文社、2020年）でも言及されたテレビコマーシャルの映像や自身の育児経験も交えつつ、説明がなされました。教育・研究現場における留意点としては、一人一人が持つアンコンシャスバイアスについて意識的に内省するとともに、意思決定者の構成に生じている偏りを批判的に検討すべきことが強調されました。さらに、大学進学前に既に存在している性差別や、出産・育児期の研究業績の減少と業績評価への長期的な影響、また、学内でなお散見される

「Boys, be ambitious!」をめぐる議論の必要性など、様々な課題が提起されました。これらは持続可能な開発目標（SDGs）の根幹にも関わる重要な課題であり、講演後には、公平な業績評価のあり方や女子学生に対する支援方策などについて質疑応答が行われ、参加者から「非常に興味深かった」「家族と共有したい」などの感想が寄せられました。

メディア・コミュニケーション研究院研究成果公開委員会の鍋島孝子教授が冒頭にFD研修の趣旨を説明し、同研究院長の奥 聡教授が閉会の挨拶を行いました。司会は同研究院の渡部聡子助教が務めました。

（メディア・コミュニケーション研究院）



講演する瀬地山教授



会場の様子

2023年度北海道大学公開講座「外国語の学びについて考える」を開催

メディア・コミュニケーション研究院及び外国語教育センターは12月16日（土）に高等教育推進機構にて2023年度北海道大学公開講座「外国語の学びについて考える」を開催しました（後援：札幌市教育委員会、公益財団法人札幌国際プラザ）。

本公開講座の趣旨は、外国語学習は技能の習得だけではなく、思考や情緒に豊かさをもたらす体験でもあることに注目し、外国語を学ぶ意義と楽しさを再考する機会とすることでした。そして、特に英語以外の外国語を学ぶ場合に焦点を当て、下記のセッションを行いました。

各セッションで紹介された主な内容

は次の通りです。日本の外国語教育にも影響を与えたCEFR（Common European Framework of Reference for Languages: ヨーロッパ言語共通参照枠）で示されている、複数言語を身につけることに関する理念。言語と文化の関係、とりわけ当該言語のコミュニケーションに関する知識を持ち合わせていることの重要性。母語と第二言語の習得プロセスの違いと第二言語習得における母語の影響。具体的なCEFRの能力記述文と各種外国語試験、外国語学習の目標設定について。

各セッションの終了ごとに参加者からは多くの質問が出され、講師と参加者との活発なやりとりが行われたこと、

参加者の豊富な知識から講師側も学びを得たことが印象的でした。CEFRの根底には生涯学習としての言語学習の奨励があり、「生涯に渡り、複数の言語を学び、到達レベルに関わらず、個人の言語レパートリーを豊かにする」ことを奨励する概念が示されています。本公開講座はこの趣旨にも適応するものであり、外国語学習について新たな切り口でこのような機会を設けたと考えています。

（メディア・コミュニケーション研究院、
外国語教育センター）

セッション1「私たちはなぜ外国語を学ぶのか」

堀 晋也（メディア・コミュニケーション研究院助教）

セッション2「英語以外の外国語を学ぶ楽しみ」

サンティアゴ・ロペス=ハラ（メディア・コミュニケーション研究院特任准教授）

セッション3「学習対象語への母語の影響」

ラドレ・アレクシ=クロード（メディア・コミュニケーション研究院特任准教授）

セッション4「外国語能力とは何か？」

山田悦子（メディア・コミュニケーション研究院准教授）



公開講座の様様



ラドレ特任准教授によるセッションの様様

低温科学研究所技術部で第29回技術報告会を開催

12月1日（金）、低温科学研究所において、低温科学研究所技術部主催・技術支援本部共催による第29回技術報告会が開催されました。

報告会では、6件の本研究所技術部が関わった研究発表や技術報告が行われた他、学外の参加者からも研究発表

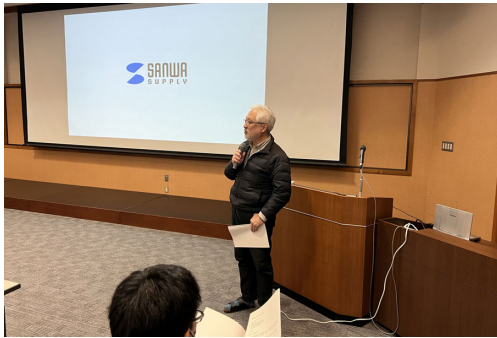
が行われました。30名弱の研究者・技術職員・学生などが参加し、活発な意見が交わされ、専門領域を越えた分野の研究や技術に触れる貴重な場となりました。

本報告会の内容は「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第29号」と

してまとめられ、発行しています。また、本研究所技術部ウェブサイトにも掲載していますので、ご覧ください。

◆ <http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



佐崎 元 技術部長の挨拶



技術報告会風景

スラブ・ユーラシア研究センターが2023年度冬期国際シンポジウムを開催

12月7日(木)～8日(金)にスラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウムが開催されました。今回のテーマは“Borders, Boundaries and War across Eurasia: Cycles of Violence and Resilience”でした。当センターは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトのグローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究プロジェクト」(以下、「EES」)における四拠点の一つ(他に東北大学、国立民族学博物館、神戸大学)として、東ユーラシアにおける文化衝突とウェルビーイング、とりわけ「越境とジェンダー」を中心テーマとする事業を実施しています。今回の国際シンポジウムは、EES四拠点が輪番で開催する国際シンポジウムという位置づけでもあり、科学研究費基盤研究(A)「戦後北東アジアにおける歴史的分岐点のマルチアーカイブ分析」とともに主催することになりました。シ

ンポジウムは対面・オンライン併用のハイブリッド形式で開催され、外国からは、ウクライナ、ロシア、イギリス、アメリカ、フィンランド、モンゴル、オーストラリア等12か国計13名(内オンライン3名)が参加し、国内からの参加者を含め盛会となりました。

第1日目の内容をEESが担当し、基調講演を含め10本の報告がなされました。パネル1では日本、フィンランド、モンゴルというロシアの隣国の視点からウクライナ戦争を議論し、そのあとの基調講演と合わせて、ポスターセッションの研究成果が示されました。パネル2では、「戦争とフェミニスト」をテーマに、ウクライナ戦争における女性たちの闘いが描き出され、パネル3ではプーチン体制下における市民の抵抗運動やクィア・セクシャリティの動向が分析されました。

第2日目は北東アジアの冷戦に関する6本の報告が行われました。パネル4

では戦後北東アジア史において日本が果たした役割について、パネル5は台湾、モンゴル、韓国という地域と冷戦の関係が議論されました。第1日目と第2日目の内容は繋がりが薄いように見えますが、現在ウクライナやパレスチナで起きていることの根幹には戦後の国際政治秩序のあり方が問われており、第1日目の関係者は戦後北東アジア史の事例から学ぶべきところは多いと、熱心に議論を聴いていました。外国ゲストらと親睦を深める中で、日本におけるアイヌ復権運動や女性運動について熱心な質問を受けたことも印象的でした。また、EES国内参加者からは、今回の登壇者を軸に別な研究プロジェクトを企画したいという意見もあり、さらなる研究協力の拡大に繋がる有意義なシンポジウムとなりました。

(スラブ・ユーラシア研究センター)

Slavic-Eurasian Research Center 2023 Winter International Symposium

Borders, Boundaries and War across Eurasia

Cycles of Violence and Resilience

PROGRAM All times are Japan time (GMT+9)

Dec. 7 Day 1 Borderlands, Gender and Migration

9:30-9:40 **Opening Remarks**

9:40-11:30 **Panel 1: Neighbor's Eyes on the Ukrainian War**

Chair and Commentator: Yoko Aoshima (SRC)

Presenters: Akihiro Iwashita (SRC)
Minna Piipponen (University of Eastern Finland, Finland)
Noboru Miyawaki (Ritsumeikan University)

11:40-12:40 **Keynote Lecture: Another Brick in the Wall: B/Ordering through Othering in a World in Turmoil**

Chair: Edward Boyle (International Research Center for Japanese Studies)

Presenter: Elisabeth Vallet (CMR-Saint Jean and University of Quebec, Canada)

14:00-15:50 **Panel 2: War and Feminists**

Chair: Mie Nakachi (Hokussai Gakuin University)

Presenters: Oksana Kis (Institute of Ethnology, Ukraine)
Ella Rossman (University College London, UK)

Commentators: Paula Michaels (Monash University, Australia)
Ikuno Ochi (Tohoku University)

16:10-18:00 **Panel 3: Anti-War Protests and the New Waves of Migration and LGBTQ**

Chair: Norio Horie (University of Toyama)

Presenters: Irina Meyer-Olimpieva (George Washington University, US)
Alexander Sasha Kondakov (University College Dublin, Ireland)

Commentators: Mayu Michigami (Niigata University)
Hyunjoo Naomi Chi (Hokkaido University)

Dec. 8 Day 2 Cold War History in Northeast Asia

13:00-15:00 **Panel 4: Re-discovering Japan as Actor**

Chair: David Wolff (SRC)

Presenters: Yasuhiro Izumikawa (Aoyama Gakuin University) and
Ayako Kusunoki (International Research Center for Japanese Studies)
Amy King (Australia National University, Australia)
Masaya Inoue (Keio University)

Commentator: James Hershberg (George Washington University, US)

15:20-17:20 **Panel 5: Critical Junctures across the Region: Taiwan, Mongolia, Korea**

Chair: Lee Jong Won (Waseda University)

Presenters: David Wolff (SRC)
Batbayar Tsedendamba (Institute of History and Ethnology, Mongolia / SRC)
Yasuhiro Izumikawa (Aoyama Gakuin University)

Commentator: Sergey Radchenko (Johns Hopkins University SAIS Europe, Italy)

17:20-18:00 **Wrap-up Discussion**

Details & Registration
<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2023winter/index.html>
Registration deadline: 24:00 (JST) on Dec. 3

Organizer
Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
Sponsored by:
*Platform for Explorations in Survival Strategies at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
*SRF KAKENHI (P1490275) "Multi-Scale Analysis of Critical Junctures in Post-war Northeast Asia"
*East Eurasian Studies Project, National Institute for the Humanities
*Eurasian Unit for Border Research at the Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
*Japan Consortium for Area Studies (LCAS)

Contact: src222@slav.hokudai.ac.jp

ACCESS MAP

Room 403, Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University, Japan

科 研 費 EES SRC

スラブ・ユーラシア研究センター2023年度冬期国際シンポジウムポスター

和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXIV」を開催

11月3日（金・祝）～12月14日（木）
 かけ、北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林においてアートプロジェクト「森のちからXIV・森の時間（とき）」が開催されました。

本プロジェクトは、アートシーンの第一線で活躍する美術家を招聘し、森の中での作品制作や地域交流イベントなどの活動を通じ、豊かな自然を蓄えた熊野地方の森の魅力や芸術文化を広く発信する催しです。主催は和歌山市に本拠を置くNPO法人和歌山芸術文化支援協会（waccs）で、2019年より本林がメインの会場に設定されてから、今年で4度目の開催となります。今回は土の色合いの多様性に着目した作品作りを続ける栗田宏一氏を招いて、和歌山研究林の庁舎建物の一室に

熊野地方の全域から採集した土が並べられたインスタレーション作品『クマノマンダラ』が制作されました。

100年近く前の木造の部屋の中央に整然と並べられた、計81箇所より集められた土たち。その多彩な色合いは、これらの全てが熊野地方という同一の地域から収集されているとは、にわかには信じがたい気持ちを起こさせます。そして水分の蒸発によるヒビ割れや、部屋の中に差し込む陽の光により、これらの土がもつ「表情」が時間とともに絶えず変化していることにも、少し時間をかけて気付かされるに至ります。栗田氏は本作品の解説文の中で「クマノにはマンダラ（宇宙）としか言いようのない空気感がある」と語られていますが、鑑賞者が作品と向き合

うことで得られるこうした体験を通じて、その空気感を共有してもらうことも制作の重要なコンセプトの一つであることが伺えました。

作品は展示準備の段階から公開され、和歌山県の内外から見学者が多く訪れたほか、作品鑑賞、座談会、庁舎建物の見学会などを組み合わせたアート・ツアーも11月4日（土）に開催され、終始盛況の様相となりました。また教育活動の一環として学生実習や個別の来客の対応時においても作品鑑賞の機会が積極的に設けられ、熊野地方という立地ならではの活動が広く知っていただく機会になりました。

（北方生物圏フィールド科学センター）



展示作品「クマノマンダラ」



展示作品「クマノマンダラ」（土が並べられた箇所）



栗田氏がアート・ツアー参加者に向けて作品を解説



学生実習での作品鑑賞の様子(大谷大学社会学部)

附属図書館でZotero講習会を開催

附属図書館では11月17日（金）に本学メディア・コミュニケーション研究院の教員で、Zoteroの開発にも関わったミハヤエル・シルツ准教授を講師として「Zotero（ゾテロ）」講習会を開催しました。講習会では、北図書館セミナールームでの対面実施とあわせて、Webex Webinarsを利用したオンラインへの配信も行いました。

Zoteroはオープンソースの文献管理ツールで、多くの文献情報を保存・管

理・利用する上で非常に役立つツールです。

講習会は、講師のシルツ准教授が日本語と英語を交互に切り替えながら説明するなど、日本語以外を母語とする留学生も理解しやすい形で実施され、インストールの手順から基本的な使い方まで実際の操作画面を見せながら紹介しました。

文献情報の保存・管理の方法のほか、拡張機能の使い方や別のツールと

の連携方法などについても触れられ、既にZoteroや他の文献管理ツールを使っている人にとっても有意義な講習会となりました。

当日は対面受講者12名、オンライン受講者37名の計49名が参加し、講義終了後には活発な質疑応答、意見交換が行われ、今後の活用が大いに期待されます。

（附属図書館）

2023年度後期 アカデミックスキルセミナー

文献管理ツール

ゾテロ

Zotero講習会

オープンソースの文献管理ツール「Zotero」について、インストールから基本的な使い方まで、実際の画面を見せながら紹介します。

後で見た論文のタイトルをコピペ、コピペ、コピペ……

投稿先ごと文献リストを直すの面倒

あれ、あの論文どこで見たんだろ？

この論文って前にも読んだことある？

11月17日（金） 16:30～17:30

対面&オンライン(Webex Webinars)

※説明は日本語と英語で行います

対象 本学教職員・学生

講師 ミハヤエル・シルツ先生 (メディア・コミュニケーション研究院)

会場 北図書館西棟2階 セミナールーム

その他

- 事前申し込みが必要です(11/16まで)
- 定員：対面40名、オンライン：100名
- 対面/オンラインいずれも、右のURLよりお申込みください
- 申込完了後、オンライン参加の方には接続先URLを通知します。
- 対面参加の方は直接会場にお越しください

お問合せ先：附属図書館学習支援企画担当 nref@lib.hokudai.ac.jp

▼申込はこちら

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/?p=120360>

開催告知ポスター

Academic Skill Seminar, 2nd-semester 2023

Reference and bibliography management tool

Seminar on "Zotero"

This seminar will **introduce** the open source literature management tool "Zotero", **from installation to basic usage**, in a hands-on way.

It's so much work to change the reference style for each submission

I can't find the article I read before.

I have read this paper? Or not?

17th NOV. 2023

OFFLINE & ONLINE (Webex Webinars) 16:30~17:30

※Seminar will be conducted in Japanese and English

To All students, faculty and staff

Presenter Dr. Michael Schiltz (RFMC, Hokkaido University)

Location North Library * Seminar Room on West Bldg. 2F

Other

- Advance registration required by 16th Nov.
- Capacity: 40 in-person / 100 online

TO REGISTER, PLEASE SCAN THIS ↓

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/?p=120361>

Contact: Hokkaido University Library nref@lib.hokudai.ac.jp

開催告知ポスター（英語）

博士学位記授与

12月25日（月）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は29人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は8人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士（環境科学）	こんどう けん 近藤 研		Influence of sea ice and subglacial hydrology on the dynamics of outlet glaciers flowing into Lützow-Holm Bay, East Antarctica (東南極リュツォ・ホルム湾に流入する溢流水河の変動に海水と底面水文環境が与える影響) 主査：教授 杉山 慎
	オヌー ONU アマラチュク Amarachukwu フェイス Faith		The effects of type II Golgi-localized proton pyrophosphatase <i>AVP2;1/VHP2;1</i> mutations on cell wall and root growth under low boron condition in <i>Arabidopsis thaliana</i> (シロイヌナズナのタイプIIゴルジ体局在プロトンピロホスファターゼ <i>AVP2;1/VHP2;1</i> 遺伝子変異の低濃度ホウ素条件における細胞壁と根の成長に対する影響) 主査：准教授 三輪 京子
	くろだ みつき 黒田 充樹		多元的計測による降海型アメマス <i>Salvelinus leucomaenis</i> の回遊特性の可視化に関する研究 主査：教授 宮下 和士
	つじい こうき 辻井 浩希		小笠原諸島父島列島周辺海域におけるザトウクジラの生息地利用と人為的騒音への応答に関する研究 主査：教授 宮下 和士
博士（農学）	シェ ルオユン Xie Ruoyun		Molecular mechanisms of rare earth element utilization by methane-oxidizing bacteria and protease-producing bacteria (メタン酸化細菌およびプロテアーゼ生産菌のレアアース元素利用機構) 主査：客員准教授 加藤 創一郎
博士（ソフトウェア科学）	カン リ 甘 莉		A Basic Study of the Effects of Mulberry Leaf Administration to Mice on Gut Microbiota and Metabolites (マウスへの桑の葉投与が腸内細菌叢と代謝物に及ぼす影響に関する基礎研究) 主査：教授 相沢 智康
博士（観光学）	ロルダン マルティネス Roldán Martínez ベアトリス アドリアーナ Beatriz Adriana		Tourism as an innovation and its diffusion among rural destinations -A Case study in Tsurui Village- (イノベーションとしての観光と農村地域への普及：鶴居村の事例) 主査：准教授 パイチャゼ スヴェトラナ
博士（工学）	かわべ たかお 河辺 隆夫		高含酸素燃料のディーゼル燃焼特性に関する研究 主査：准教授 柴田 元
	シ ジュンリン SI Junling		Mechanical response and damage analysis of asphalt pavement subjected to wheel loads in seasonally cold region (輪荷重を受ける積雪寒冷地のアスファルト舗装の構造解析手法の提案) 主査：教授 石川 達也
	ワン ニイ Wang Ni		Experimental Investigation of Chloride Attack in Steam-cured Concrete with Supplementary Cementitious Materials under Salt-laden Environment in Cold Region (混和材を用いて蒸気養生したコンクリートの寒冷地環境における塩害に関する実験的研究) 主査：教授 杉山 隆文
博士（理学）	カン シュン 康 逊		High-Pressure Synthesis, Crystal Structures and Physical Properties of Perovskite-Related 5d Transition Metal Oxides (ペロブスカイト型5d遷移金属酸化物の高圧合成、結晶構造と物性) 主査：教授 松井 雅樹

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士（理学）	リュウ ヤシヒロ 刘 並平	Biosynthetic Studies of Fungal Terpenoids and Meroterpenoids Having Antiinsectant and Antitumor Activity (抗虫活性および抗腫瘍活性を有する真菌テルペノイドおよびメロテルペノイドの生合成研究) 主査：教授 永木 愛一郎	
博士（工学）	ナカベ ヨウキ 中谷 勇希	Development of Highly Efficient Multimetallic Alloy Catalysts for Alkane Dehydrogenation (アルカン脱水素に有効な多元素合金触媒の開発) 主査：教授 菊地 隆司	
	リュウ ケ 刘 可	Development of Multimetallic Alloy Catalysts Efficient for CO ₂ utilization by Dry Reforming of Hydrocarbons (炭化水素のドライリフォーミングによるCO ₂ 利用に有効な多元素合金触媒の開発) 主査：教授 向井 紳	
博士（医学）	オホカワ ヨウキ 大川 裕貴	胆道癌における遺伝性腫瘍関連遺伝子バリエーションと相同組換え欠損についての研究 (Study of hereditary cancer variants and homologous recombination deficiency in biliary tract cancer) 主査：教授 武富 紹信	
	タカクワ ヒロ 高桑 央	独立した非膜性オルガネラとしてのパラスペクル形成の分子メカニズムに関する研究 (Study on the molecular mechanism for the paraspeckle formation as distinct membraneless organelles) 主査：教授 野田 展生	
	トキ タカヒサ 土岐 崇幸	小児期脊柱側弯症手術の術中管理に関する研究 (Studies on perioperative management for pediatric scoliosis surgery) 主査：教授 矢部 一郎	
	ナカハラ ヨウイチ 中村 悠一	外来受診解析に基づくてんかん患者の行動特性に関する研究 (Studies on Behavioral Traits of Patients with Epilepsy Based on Analysis of Outpatient Visit) 主査：教授 藤村 幹	
	ニシハラ ヨウスケ 西村 友佑	ポリグリコール酸シートと塩基性線維芽細胞増殖因子を用いた内視鏡的粘膜炎下層剥離術後の食道狭窄に対する新規予防法の開発 (Application of polyglycolic acid sheets and basic fibroblast growth factor to prevent esophageal stricture after endoscopic submucosal dissection in pigs) 主査：教授 武富 紹信	
	サイトウ タカヒロ 齋藤 崇宏	膵癌腹膜播種病変における光線力学診断に関する研究 (Studies for photodynamic diagnosis of peritoneal dissemination in pancreatic cancer) 主査：教授 谷口 浩二	
博士（獣医学）	グオン タン VUONG Tuan フォン Phong	Effects of the ovarian steroid hormone profile on the endometrial EGF concentration of the following estrous cycle in dairy cows (乳牛における卵巣ホルモン濃度推移が次の発情周期での子宮内膜EGF濃度に及ぼす効果) 主査：教授 坪田 敏男	
博士（文学）	コウ ソンギョ 高 先慶	韓国語における行為要求の「silkeyyo」に関する研究 主査：教授 李 連珠	
博士（人間科学）	ヨウ ユショウ 楊 宇翔	Unraveling motor area plasticity: investigating the effects of neurofeedback and tDCS on motor learning (運動野の可塑性を解明する：ニューロフィードバックとtDCSが運動学習に及ぼす影響) 主査：准教授 小川 健二	
博士（工学）	グイリン フォン Guilin Feng	Liquid-Phase Photo-induced Covalent Modification (PICM) of Single-Layer Graphene (単層グラフェンの液相光誘起共有結合修飾(PICM)) 主査：教授 雲林院 宏	
博士（情報科学）	オウ コウジエン 王 浩炯	Algal Blooms as Marine Ecosystem Risk: Forecasting Spread and Biogeochemical Stress (海洋生態系リスクとしての藻類の爆発的増殖：拡散と生物地球化学的ストレスの予測) 主査：教授 大鐘 武雄	

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士 (情報科学)	コン 孔 ショウハン 暁涵		A Study on the Design Optimization of the Bipolar Permanent Magnet Type Low-field MRI Device (バイポーラ永久磁石型低磁場MRI装置の設計最適化に関する研究) 主査：教授 五十嵐 一
	エサウ ズール Esau Zulu		Estimation of Hosting Capacity of Photovoltaic Generations in Distribution Networks using Hybrid Particle Swarm and Gradient Descent Optimization (粒子群最適化と勾配降下法のハイブリッド最適化による配電系統における太陽光発電接続可能量の推定) 主査：准教授 原 亮一
	ゾウ ショウウセン Zang Xiaolian		Unique Surface Enhanced Raman Scattering Induced by Plasmon-Nanocavity Coupling and its Application to Elucidating the Mechanism of Enhanced Water Oxidation Under the Strong Coupling Conditions (プラズモンとナノ共振器のカップリングにより発現する特異な表面増強ラマン散乱とそれを用いた強結合下における水の酸化の増強メカニズム解明) 主査：教授 橋本 守
	まつだ じゅんき 松田 潤樹		パワーアシストシステムにおける操作対象物の操作方向を考慮した軌道上への誘導力場の設計と手先誘導効果の検証 主査：教授 田中 孝之

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士 (環境科学)	なかむら かずき 中村 一樹		低気圧に伴う降雪に起因する表層雪崩発生危険度の予測手法の開発 主査：教授 山中 康裕
	ももた かずゆき 百田 和幸		Experimental ecological study on spawning and development of four genera, four species of pufferfishes distributed in freshwater and brackish water regions (汽水・淡水域に生息するフグ科魚類4属4種の繁殖と成長に関する実験生態学的研究) 主査：教授 宗原 弘幸
博士 (農学)	ますい のぼる 増井 昇		高濃度オゾン環境下におけるシラカンバの虫害と植物由来揮発性有機化合物の関係性に関する研究 主査：教授 松浦 英幸
	あるが のぞみ 有賀 望		北海道豊平川における野生サケの産卵環境の変化と個体群存続可能性の評価 主査：教授 中村 太士
博士 (観光学)	ふくやま たかふみ 福山 貴史		条件不利環境の観光資源化とその活用促進メカニズム－「雪氷観光」の創造事例を対象として－ 主査：教授 西山 徳明
博士 (理学)	あさぬま たかひろ 浅沼 高寛		反復配列がヘテロクロマチン形成を促進するメカニズムの研究 主査：教授 坂口 和靖
博士 (医学)	なかむら じゅんいち 中村 順一		肺静脈閉塞性疾患/肺毛細血管腫症に対する経口肺血管拡張薬およびイマチニブの効果・安全性 (Efficacy and safety of oral pulmonary vasodilators and imatinib for pulmonary veno-occlusive disease / pulmonary capillary hemangiomatosis) 主査：教授 若狭 哲
博士 (文学)	いしかわ ひろこ 石川 洋子		看護師の専門職倫理－ヘーゲル哲学における「知」と思考－ 主査：教授 藏田 伸雄

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
5.12.16	Caleb King 氏（札幌農学校初代教頭ウィリアム・スミス・クラーク博士御子孫）	クラーク博士に関する情報収集



Caleb King 氏（左から3人目）

（国際部国際連携課）

■人事

令和5年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 (辞職)	木 村 和 弘 松 野 吉 宏	大学院獣医学研究院教授 北海道大学病院教授

令和6年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【総長補佐】 (期間：令和6年3月31日まで)	葛 西 誠 也	量子集積エレクトロニクス研究センター教授
【教授】 大学院農学研究院教授 大学院教育学研究院教授 大学院教育学研究院教授 大学院工学研究院教授 大学院工学研究院教授 大学院獣医学研究院教授	愛 甲 哲 也 北 村 嘉 恵 光 本 滋 松 浦 妙 子 渡 邊 直 子 岡 松 優 子	大学院農学研究院准教授 大学院教育学研究院准教授 大学院教育学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 大学院工学研究院准教授 大学院獣医学研究院准教授

新任教授紹介

令和6年1月1日付



農学研究院教授に

あいこう てつや
愛甲 哲也 氏

基盤研究部門生物資源科学分野

生年月日

昭和42年11月1日

最終学歴

北海道大学大学院環境科学研究科博士後期課程中途退学（平成5年10月）
博士（農学）（北海道大学）

専門分野

造園学

教育学研究院教授に

きたむら かえ
北村 嘉恵 氏

生年月日

昭和40年5月12日

最終学歴

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程退学（平成12年6月）
博士（教育学）（北海道大学）

専門分野

教育史



教育学研究院教授に

みつもと しげる
光本 滋 氏

生年月日

昭和45年4月2日

最終学歴

中央大学大学院文学研究科博士後期課程退学（平成12年12月）

専門分野

高等継続教育



工学研究院教授に

まつうら たみこ
松浦 妙子 氏

最終学歴

東京大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了（平成18年3月）
博士（理学）（東京大学）

専門分野

陽子線治療物理、医学物理

応用量子科学部門
量子生命工学分野



工学研究院教授に

わたなべ なおこ
渡邊 直子 氏

応用量子科学部門
量子エネルギー工学分野

生年月日

昭和42年8月4日

最終学歴

Ph.D. (Doctor of Philosophy) (米国カリフォルニア大学デービス校) (平成18年6月)

専門分野

環境工学、原子力工学



獣医学研究院教授に

おかまつ ゆうこ
岡松 優子 氏

基礎獣医学分野
生化学教室

生年月日

昭和50年3月31日

最終学歴

北海道大学大学院獣医学研究科博士課程修了（平成20年3月）
博士（獣医学）（北海道大学）

専門分野

代謝生化学

訃報

名誉教授 ^{すぎのめ} 杉野目 ^{ひろし} 浩 氏
(享年93歳)



名誉教授 杉野目浩 先生が、令和5年12月4日にご逝去されました。

杉野目先生は昭和5年北海道札幌市に生まれ、同28年北海道大学理学部化学科を卒業、引き続き同大理学部化学科旧制大学院に進学後、同32年2月同大学院を退学され、同年3月北海道大学理学部助手に採用されました。昭和36年2月に北海道大学より理学博士の学位を授与されたのち、同年9月から同

39年4月までラムゼー記念奨学生として英国ケンブリッジ大学に留学、同年3月には同大学よりPh.D.の学位を授与されました。昭和39年4月から米国マサチューセッツ工科大学博士研究員、同40年8月北海道大学理学部助教授、同55年4月北海道大学工学部教授に昇任し同学部合成化学工学科有機合成化学講座を担当、同学科並びに有機合成化学講座の発展に尽力されました。平成6年3月停年退官、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

研究面では、有機合成化学における光誘起反応並びに有機電解反応の重要性と将来性に早くから着目し、数々の新規光反応、光誘起高選択的ラジカル反応、高選択的電極反応プロセスの開発、さらにはこれら新規プロセスを用いた生理活性分子の高効率合成に成功し、当該分野の新局面を拓かれました。これらの業績により平成5年3月に日本化学会賞を授与されました。

学内においては、全学住宅委員会委員長、教養課程教育協議会などの委員を歴任、工学部においては図書委員会委員長、機構改革特別委員会の初代委員長等を務められ、大学院重点化に貢献されました。また、昭和57年から5年間に、北海道大学体育会山岳部顧問を務められました。

学外においては、日本化学会理事、同北海道支部支部長、文部省学術審議会専門委員、社団法人日本山岳会評議員、北海道日英協会会長、公益財団法人杉野目記念会理事長などを歴任され、学術研究の発展と国際交流に尽力され、国や地方の活性化並びに文化的発展に大きく寄与されました。

杉野目先生の長年にわたる学術研究、国際交流並びに人材育成へのご貢献に感謝し、謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 ^{おきの} 沖野 ^{のりお} 教郎 氏
(享年90歳)



名誉教授 沖野教郎 先生が、令和5年12月9日にご逝去されました。

沖野先生は、昭和8年に生まれ、昭和31年に徳島大学を卒業後、京都大学大学院に入学、昭和36年に同博士課程を修了され工学博士を授与されました。同年、京都大学工学部助手に任官、昭和38年に助教授に昇進されています。京都大学在職中は高速転がり軸受や軸受の電磁制御の研究に従事される傍ら、ご本人の造語である「自動デザイン」を着想し、研究の準備を進めていました。昭和42年に北海道大学工

学部精密工学科へ移籍し、20年間在籍いたしました。その後、昭和62年に京都大学応用システム科学専攻、平成9年に滋賀県立大学工学部教授に就任し、平成16年に退官されています。平成9年には北海道大学名誉教授及び京都大学名誉教授、平成16年に滋賀県立大学名誉教授を授与されています。

北海道大学では「自動デザイン」を実現するべくCADの研究を開始し、3次元CADシステムTIPS-1を開発、TIPS-1は昭和48年に国際会議PROLAMAT'73で発表され、同時に発表されたケンブリッジ大学BUILDと共に世界初の3次元CADシステムとして世に知られました。TIPS-1はCADからCAE、CAMへ至る生産プロセスモデルの方法論を示し、デジタルものづくりの鎗矢となりました。その後もTIPS-2やCAD/CAM、ロボテックス、生物型生産システムや自律分散システム等の研究を実施されています。

国際的にはCAM-I及びIFIP WG5.7のメンバーとして活躍され、TIPS-1は100を超える大学、研究施設に普及しま

した。また、昭和51年からコーネル大学へは射出成形金型プロジェクトのCAD開発にむけて、10年間に10人以上のスタッフ・学生を留学させています。

国内では精密工学会、日本機械学会、情報処理学会、ロボット学会他多数の学会等の会員として研究・各種委員会活動を行い、精機学会大越記念賞、精密工学会蓮沼記念賞、他等多くの賞を受賞されています。

学内では各種委員を務めてきました。特に大型計算機センターの運営には開設当初から参画し、昭和49年より広報専門部長、システム専門委員長、データベース専門委員長を歴任し、研究開発部長として京都大学への異動直前までその任にあたられました。

平成24年には瑞宝中綬章を叙勲されております。個人的には裏千家茶道の桐蔭会会員でもありました。ここに謹んで学術研究発展と人材育成への貢献に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

(工学院・工学研究院・工学部)

名誉教授 望月 喜市 氏
(享年92歳)



名誉教授 望月喜市 先生が11月25日にご逝去されました。

望月先生は、1931年に静岡市で生まれ、1955年に一橋大学商学部を卒業、1957年に一橋大学大学院理論経済学研究科修士課程を修了されました。1967年に博士号を取得されました。1962年から立命館大学、1969年から小樽商科大学で教鞭を取られました。1978年に本学スラブ研究センター教授に着任さ

れ、1994年に定年退官されるまで、本センターのソ連・ロシア経済研究を主導されました。その間、1983年から2年間、本センターのセンター長も務められました。

望月先生の専門は主にソ連・ロシアの経済であり、ソ連・ロシア経済の実証分析、経済改革の現状分析において優れた業績を残されました。とくに、ソ連経済の再生産構造、国民所得循環並びにそれに基づく軍事費の推計などに関する一連の業績が、高く評価されました。ソ連経済に関する統計情報が限られていた時期における先生の研究は、日本におけるソ連経済実証分析の先駆的業績と位置付けられます。そうした研究成果をまとめたものとして、『ソ連の経済統計』（アジア経済研究所、1974年）、『ソ連経済の再生産構造：その統計的研究』（多賀出版、1984年）などがあります。

先生の学問的業績のもう一つの特徴

として、日本とソ連・ロシアとの経済関係の研究に本格的に取り組まれたことが挙げられます。この研究の延長線上として、日本に近いシベリア・極東経済の研究の面でも多くの先駆的な業績を残しています。このような先生の研究は、日本とソ連・ロシア、あるいは北海道とシベリア・極東との経済交流の発展に指針を与えるものとなりました。この分野に関しては、研究だけに留まらず、実際にこのような交流を発展させるために様々な形で尽力されました。そして、数年前まで、多くの研究会や集会で、北方領土問題解決のための提案や発言を繰り返されておられました。

望月先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(スラブ・ユーラシア研究センター)

編集メモ

- 大学入学共通テストが1月13日（土）、14日（日）の2日間にわたって行われました。

当日の試験会場は、志望校を目指す受験生たちの良い

緊張感が漂っていました。

今年度は大きなトラブルもなく無事に終了しました。業務に当たられた職員の皆様、お疲れ様でした。



高等教育推進機構での設営の様子



テスト当日に試験会場へ入場していく受験生の様子

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は、遠友学舎です。北18条門を抜けると、大きな屋根が特徴的な遠友学舎が見えてきます。北海道大学創基125周年記念事業の一環で2001年に建てられました。名称の由来は新渡戸稲造夫妻が、様々な事情で満身に教育を受けられない若者のために開いた「遠友夜学校」です。新渡戸夫妻の意思を受け継ぐように、今もボランティアによる授業が開かれています。

キャンパス風景 46 遠友学舎（北18条西7丁目）



北大時報 ① No.838 令和6年1月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>